

山梨県北都留郡上野原町

南大浜遺跡

—中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書—

2000. 3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京建設局

山梨県北都留郡上野原町

南大浜遺跡

—中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書—

2000. 3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京建設局

序

本報告書は、中央自動車道の慢性的な渋滞の緩和を目的に、中央自動車道富士吉田線（上野原町～大月市）の改築工事に先立って、1997年（平成9）4月末から9月初旬にかけて発掘調査された北都留郡上野原町鶴川字日野道に所在する南大浜遺跡についてその成果をまとめたものであります。

上野原町は、山梨県でも最も東に位置し都心に近いためか、近年、工業団地の大規模な開発や中央自動車道の改築工事、町道の建設など、それに伴う発掘調査も増えました。そのため、町内最大規模の大柄遺跡群の調査も実施され、縄文時代早期から平安時代にかけての集落遺跡として周知されるようになりました。

南大浜遺跡は、この大柄遺跡群の一つで、旧甲州街道鶴川宿と仲間川を挟んだ対岸の台地上に位置しています。今回の調査対象区域は、遺跡全体のほんの北側の先端部分1,600m²ほどですが、調査の結果、縄文時代早期の落とし穴が39基、縄文時代から平安時代の土坑が85基、弥生時代の埋納遺構が1基、平安時代以降の溝状遺構が57条ほど確認されました。現在、中央自動車道によって遺跡の中央部分を失っておりますが、その南側も、1998年（平成10）に帝京大学山梨文化財研究所によって調査され、縄文時代の竪穴住居跡や敷石住居跡が発見されています。今回の調査区域からは住居跡の発見はありませんでしたが、縄文時代早期には狩猟の場として利用されていたことが推定できます。また、弥生時代の壺は、山梨県内でも極めて資料の少ない中期中葉頃のもので、再葬墓として使われた可能性が指摘されています。弥生時代には、この周辺に墓域があったと考えられ、台地先端の狭い地域ではありますが、大きな成果が得られたと考えております。

本報告書が、多くの方々の研究や学習資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々のご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

1. 本報告書は1997（平成9）年度に中央自動車道拡幅工事に先立ち発掘調査された、北都留郡上野原町南大浜遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は山梨県教育委員会が日本道路公団より委託され、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
3. 発掘調査および出土品の整理は埋蔵文化財センターで行い、笠原みゆき・伊藤伸一が担当した。
4. 本報告書の編集は笠原が行った。なお、第4章においては、第1節を㈱パリノ・サーヴェイに、第2節を㈱ズコーシャにそれぞれ委託した。
5. 写真撮影は、遺構については笠原・伊藤が、遺物については日本写真家協会の塚原明夫氏がおこなった。
6. 石器石材鑑定は、保坂康夫氏による。
7. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査および本報告書の作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

上杉　陽（都留文科大学）

宮沢公雄（帝京大学山梨文化財研究所）

小西直樹（上野原町教育委員会）

奈良泰史（都留市教育委員会）

凡　　例

1. 遺跡全体におけるX・Y数値は、平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく格座標数値である。各遺構の平面図の北を示す方位は、すべて座標北をさす。
2. 掲載した図面の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構 地図	1 : 50,000	遺物 織文土器（拓本）	1 : 3
土坑	1 : 40	弥生土器（大型）	1 : 4
溝	1 : 60	弥生土器（拓本）	1 : 3
弥生の壺出土範囲	1 : 40	石器（大型）	1 : 6
各遺構の微細図	1 : 20	石器（中型）	1 : 3
全体図	任意	石器（小型）	1 : 1

3. 遺構挿図中の表記は次のとおりである。
 - a. 遺構図中の断面図脇にある数値は標高を示す。
4. 遺物挿図中の表記は次のとおりである。
 - a. 遺物挿図中、磨石・凹石などの磨面は、断面に矢印を、凹石の窪んだ部分はロットリングで表現し、光沢のある磨面・敲石の使用痕はスクリントーンで示した。

光沢のある磨面



敲石の使用痕



5. 土色（覆土）の説明には『標準土色帖（1994年版）』（農林省水産技術会議事務所監修・財團法人日本色彩研究所監修）を参考に記述した。
6. 遺構および遺物写真的縮尺は統一されていない。
7. 本書で用いた地図は建設省国土地理院発行の地形図（1 : 50,000）である。

目 次

序

例言・凡例

本文目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経緯と調査体制	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査の方法	2
第4節 基本層序	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と現状	3
第2節 地質・自然環境	3
第3節 歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	7
第1節 繩文時代の遺構と遺物	7
第2節 弥生時代の遺構と遺物	12
第3節 平安時代以降の遺構と遺物	12
第4章 自然科学分析	13
第1節 南大浜遺跡の自然科学分析	13
第2節 南大浜遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析	18
第5章 まとめ	25

挿 図 目 次

第1図 土層柱状図	2
第2図 段丘分布図	3
第3図 遺跡の位置および周辺の遺跡分布図	5
第4図 全体図	8
第5図 第1面等高線図	9
第6図 遺物分布図	9
第7図 弥生土器接合図・微細図	10
第8図 南大浜遺跡の模式柱状図	14
第9図 南大浜遺跡の植物珪酸体群集の層位的分布	16
第10図-1 南大浜遺跡の弥生土器出土位置	18
第10図-2 サンプル採取位置	19
第11図 南大浜遺跡の試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	20
第12図 南大浜遺跡の試料中に残存する脂肪のステロール組成	21

第13図	南大浜遺跡の試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	24
第14図	南大浜遺跡の試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	24
第15図	遺構1（集石遺構）	26
第16図	遺構2（陥し穴）	27
第17図	遺構3（円形土坑）	28
第18図	遺構4（溝状遺構）	29
第19図	遺構5（溝状遺構）	30
第20図	遺物1（縄文土器）	31
第21図	遺物2（縄文土器・土製円盤）	32
第22図	遺物3（弥生土器）	33
第23図	遺物4（土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・釘）	34
第24図	遺物5（有舌尖頭器・石鏃・石核・フレイク）	34
第25図	遺物6（打製石斧）	35
第26図	遺物7（打製石斧・礫器）	36
第27図	遺物8（礫器・使用痕ある剥片）	37
第28図	遺物9（磨石・くぼみ石・敲石）	38
第29図	遺物10（敲石・石皿・多孔石・磨面のある台石）	39

表 目 次

表1. 調査進行表	1
表2. 周辺の遺跡一覧表	6
表3. 南大浜遺跡の植物珪酸体分析結果	15
表4. 南大浜遺跡の放射性炭素年代測定結果	16
表5. 南大浜遺跡のリン分析結果	17
表6. 南大浜遺跡の試料の残存脂肪抽出量	19
表7. 南大浜遺跡の試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	19
表8. 土坑・溝状遺構一覧表	40
表9. 石器觀察表	43

写真図版目次

図版1. 遺跡全景（東南側から航空撮影）	46
図版2. 調査風景・遺構（その1）	47
図版3. 遺構（その2）	48
図版4. 遺構（その3）	49
図版5. 遺物（土器）	50
図版6. 遺物（石器・鉄器）	51
図版7. 植物珪酸体	52
図版8. 炭化材	53

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経緯と調査体制

本発掘調査は、中央自動車道の渋滞緩和を目的とした大月市ー上野原町区間の車線改築工事に先立つものである。山梨県を東西に走る中央自動車道は、車量の増加に伴い慢性的な渋滞をきたしており、特に、上野原町から富士河口湖方面と長野方面へ分岐する大月市までは、地形の複雑さから、休日の渋滞は回避できないものとなっていた。そこで、上野原ICー大月IC間の車線拡幅工事が計画され調査に至った。

分布調査によって、大月市内3カ所、上野原町地内で4カ所の計7カ所が発掘調査対象地域としてあげられ、1995(平成7)年度から調査が実施してきた。本遺跡は上野原町地内4カ所目にあたり、1995(平成7)年12月9日～15日まで試掘調査を行い、縄文時代の土坑跡1基と遺物を検出した。この結果を受け、日本道路公団から山梨県教育委員会学術文化財課へ調査が委託され、山梨県埋蔵文化財センターにおいて、買収予定地のうち、発掘調査の承諾が得られた部分について調査をおこなうこととなった。その期間は、1997(平成9)年4月21日～9月10日までのほぼ4ヶ月半である。

工程	時間	1995		1997		1998		1999		2000					
		12	1	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
南大浜遺跡	試掘調査														本格的整理 (報告書作成)

第1表 調査進行表

〈調査体制〉

- 調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当 笠原みゆき・伊藤伸一
発掘参加者 天野喜進・網野房夫・安藤猛夫・尾形美登・岡部 照・長田真夫・落合金男・加藤文宣・上條良作・小鷹利彰・古根村典子・清水すえ子・志村恵子・志村昭二・岡口和夫・篠地文博・出羽和雄・富田寛・中井清美・中村克己・中村昌余・島山朝雄・松村恭子・丸山秀子・山口琢美・渡辺和子
整理作業者 伊藤順子・大森仁美・長田てる美・楠間美季江・佐藤友紀・内藤由起子・中込みち子・名取洋子・林久美子・渡辺麗子

第2節 調査概要

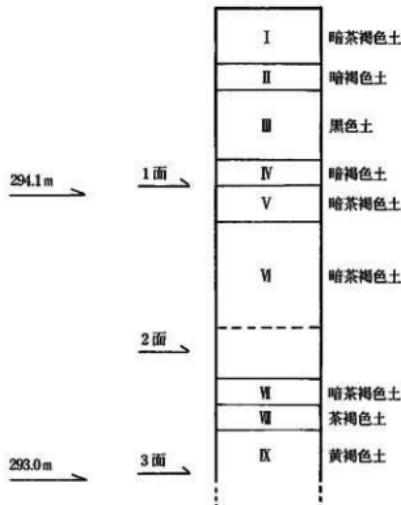
南大浜遺跡は、北都留郡上野原町に所在する大門遺跡群の一つで、中央自動車道富士吉田線車線改築工事に伴い発掘調査が行われた。調査面積は1,600m²だが、平安時代から縄文時代までの文化層が3面にわかつたため、総調査面積は4,800m²になる。調査は3回に分け行い、文化層と文化層の間は重機で掘削する作業を行った。その結果、上層の第1面（平安時代～弥生時代）では、土坑54基、溝状遺構57基、弥生時代の再葬墓として使用されたとおもわれる壺1基が確認できた。中層の第2面（縄文時代中期～前期頃）では集石3個所、試掘で既に確認されていた焼土範囲1ヶ所が確認できた。下層の第3面（縄文時代早期頃）では、陥し穴39基、土坑19基、風倒木痕12ヶ所が発見された。まず、1面の調査で確認された土坑は、関東一円で普遍的に見られる円形の土坑である。遺物を殆ど含まず、直径1m前後、深さ0.5m程の規模をもち、土坑の断面は皿状や鍋底状をしている。溝状遺構は二種類に分けられ、5mを越える溝状のものと、2mほどのものである。両方とも北北東～南南西に長軸をもっており、前者は間隔を置いて二条一組ともおもえる意図的な配置をしている。後者は、円形土坑と切り会うものや、単独だったりまちまちである。これらは、平安時代以降の遺構であると考えられる。また、同調査面では弥生土器が、調査区東側・西側隅に集中しており、壺は東側から出土している。上野原町地内から、弥生時代中期の完形に近い土器が出土するのは初めてのことと、かつ県内でも類例の少ない貴重なものであった。2面で確認された集石は、焼土や炭化材などは確認できず、これも時代を明確にできるものではなかった。3面は、落とし穴が39基確認できたが遺物は確認できなかった。底面に小さな穴を1ヶ所から数ヶ所もつものがあり、形は円形か楕円形である。調査区内に転々と風倒木痕があり、その周辺に直線的あるいは円形に配置されているようく見える。

第3節 調査の方法

国土地標を基準に、東西方向に西から1・2・3……、南北方向に北からA・B・C・D・Eとグリッドを設定した。基準はB24杭で、X=-40840、Y=53990である。グリッドの間隔は5mとした。

第4節 基本層序

調査区は南西から北東に傾斜し、東西の端では4メートルの比高差がある。土層は西側C-2グリッド南壁と、A-19グリッド北壁で観察をおこなった。堆積は比較的安定しており、東西での相違はあまり観られなかった。第1面の確認面はV層だが、平安時代以降の生活面はIII層くらいからだと考えられる。第2面の確認面は、VI層下部である。第3面の確認面はIX層のやや下がった位置であった。



第1図 土層柱状図 S=1/20

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と現状

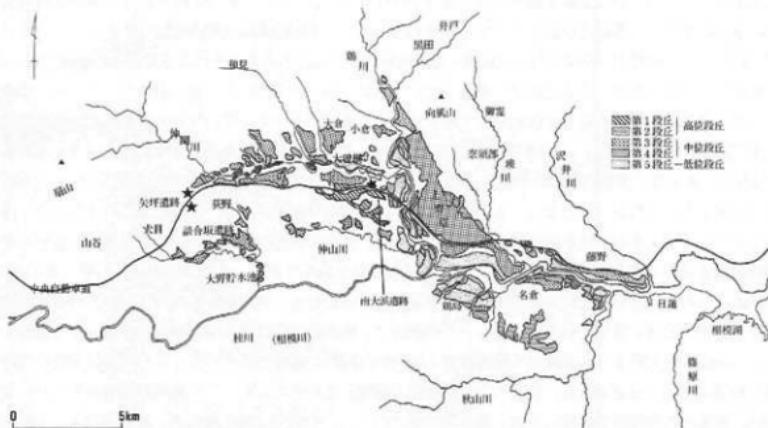
遺跡は、北都留郡上野原町鶴川字日野道1060番地に所在する（第3図）。上野原町は、山梨県の東端、東京・神奈川との県境に位置する。町の約80%が山林で、東西に流れる相模川（桂川）と、その支流である鶴川、さらにその支流となる仲間川に形成された河岸段丘が発達している。なかでも、仲間川によって形成された高位河岸段丘は、大門面とよばれ、遺跡が集中する場所である。遺跡はこの大門面の北側に位置している。

調査区は、中央自動車道富士吉田線を大月から八王子方面に向かって鶴川大橋手前左側の台地上にある。また、上野原町の中心からすれば、主要地方道大月一上野原線を西に走り鶴川から大門集落へ向かう途中にある、中央自動車道を渡る高架橋の手前右側の山林の頂上部がそうである。現在は、調査時の位置より數10mほど斜面全体が削られ高速道路に近くなっている。さらに、新しい道路と調査区の東側にあった高架橋も西側に取り付け直され調査前の地形とは大きく変化している。

第2節 地質・自然環境

上野原町の北側境界には、秩父山系を中心とした関東山地が、関東平野の西側を画するように連なっている。その秩父山地の東に長く延びる一支脈が主峰三頭山（1,528m）から南東にむかって丸山（1,098m）・陣馬山（857m）・景信山（727m）・高尾山（599m）へと延びる山稜で、上野原町と東京都・神奈川県境になる。また、この山稜は、相模川水系と秋川水系の分水嶺としても知られている。山中湖を水源とする相模川（桂川）は、大月市域では桂川の名称で親しまれ、都留市・大月市を経て上野原町の南側を東西に流れる。関東山地の南限は相模川の谷で、これは地形的・地質的に極めて顯著な境界線をなしている。すなわち、この谷にはほぼ沿って、大規模な藤ノ木一愛川断層が走り、北側の古第三系およびそれ以前の諸岩層と、南側の新第三系とを画然と分けている。古くから、人の営みは川とともに成り立ち、現在でも相模川へ流れ込む鶴川、更にこれらの流域に生活的領域が広がっている。

上野原町の生活領域は鶴川に沿ってその多くを占めている。遺跡の存在する場所は鶴川の支流、仲間川によっ



第2図 段丘分布図

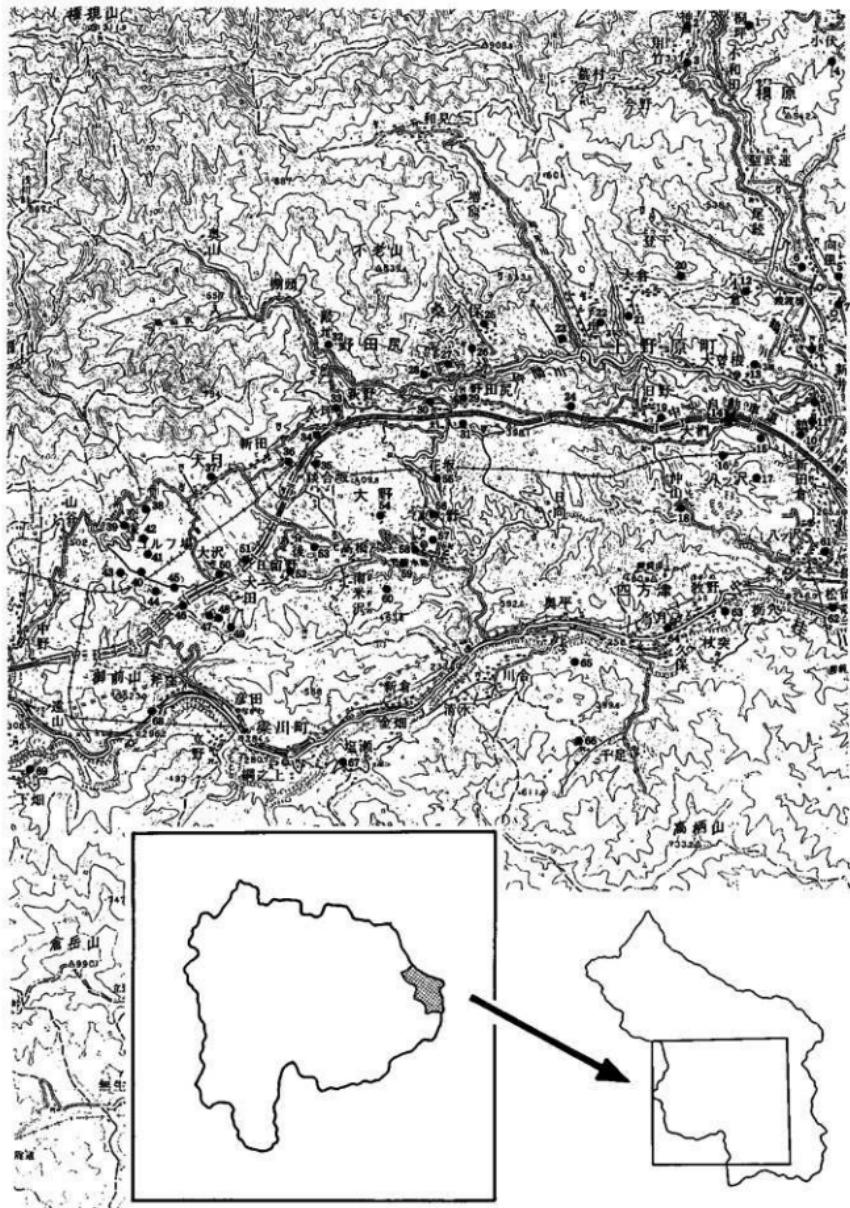
て形成された高位段丘である。この段丘は大門面と呼ばれ、320~340mの高度を持ち、段丘の堆積物には、亜円礫または亜角礫と、この礫層を風成のpm-1軽石層を含むローム層が、整合に覆っているという特徴がある。礫層は砂岩・頁岩・粘板岩・凝灰岩などからなり、これら堆積物の特徴から、大門面は、関東地方南部の下末吉面に対比することができる。また、その地域の地層の分布は大きく三つに分類できる。北部の四万十統に属する三倉層群の深城層・瀬戸川層群の権現山層・瀬戸層、中部の富士川統に属する島田層・桂川層・上野原層、南部の御坂統に属する四方津層である。相模川流域の第四紀層には、ローム層と段丘礫層および崖錐堆積物があり、ローム層は先第三紀層の山地と新第三紀層の低地との間に堆積し、段丘礫層は相模川（桂川）・仲間川・鶴川の河岸に発達しているのである。

第3節 歴史環境

遺跡が存在する上野原町では、町内を流れる相模川（桂川）・鶴川・その他の支流沿いに多くの遺跡が点在し、現在では100ヶ所ほどの遺跡が確認されている。今回は、そのうち南大浜遺跡が位置する台地を形成した仲間川沿岸と、台地を境に南側を流れる相模川（桂川）、鶴川から西側の地域にある69遺跡を示した。上野原町の埋蔵文化財の歴史は旧石器時代から始まり、その中心は、大月市との町境にある扇山山麓が推定される。そこで、順に当町の遺跡を概観していく。

旧石器時代では、扇山山麓の恋塚下遺跡（39）・談合坂遺跡（35）と西原の中群遺跡が知られる。談合坂遺跡ではブレイド・中群遺跡ではポイントとサイドスクリーパー等が表採され町誌に記載されている。談合坂遺跡は平成7年に発掘調査が行われているが、その調査区からはこの時期の遺構等は確認されなかった。

縄文時代では、相模川（桂川）・鶴川・仲間川等の河岸段丘や扇状地に遺跡が集中している。早期・前期の遺跡は、扇山山麓と仲間川の河岸段丘に比較的古い遺跡が点在し、次第に鶴川・境川流域に広がり遺跡数も増加する。最近の調査例としては談合坂遺跡・大門遺跡群（大門I（16）・II遺跡（17）・大浜遺跡（15）・南大浜遺跡（14）が上げられ、南大浜遺跡の今回の調査区からは遺構は発見されなかったが、草創期の有舌尖頭器1点が検出された。また、談合坂遺跡と大門II遺跡からは早期の住居跡や陥し穴を含む土坑群が発見され、扇山山麓一帯の遺跡の密度の濃さが窺える。遺物としては、撚糸文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器などや、早期末葉の東海系下吉井式土器も出土している。前期の遺跡は、前述の談合坂遺跡・大門遺跡群をはじめ、中野原Ⅲ（42）・仲大地（44）・大倉遺跡（21）などが集落跡として認識されている。また、鶴川流域の猪丸遺跡からは、羽状織文土器群の花積下層式土器が出土したことが上野原町誌に記され、1995（平成7）年に調査された矢坪遺跡（34）は前期末の十三菩提式土器が出土する単独遺跡である。中期の遺跡は町内全体に広がり、前期まで遺跡が確認されなかった相模川（桂川）右岸の鶴島・島田地域にまで確認されるようになるなど、その数も激増する。前半は五領ヶ台式土器を出土する遺跡で、棚頭（32）・君越（38）・中野原I（40）遺跡などがある。中頃から後半にかけて遺物は勝坂式土器・加曾利E式土器を出土する遺跡が中心で、町内で最も数が多く、また時期が重複する事が知られる。このことは、同じ地域に何世代に渡って定住する生活環境が整ったことが考えられる。上野原町は現在、東京都と神奈川県との県境にあり首都圏の影響が大きい地域である。縄文時代中期のこの時代は、東関東では阿玉台式土器が主流となっており、基本的には生活圏に相違がある。しかし、この土器が全く出土しないわけではなく、文化の交流を想像させる。小伏（神庭）遺跡では勝坂式から加曾利E式までの遺物が発見され、加曾利E II式の完形土器など遺物を今に残している貴重な遺跡である。また、西原地区の原・郷原遺跡は、1997（平成9）年、上野原町教育委員会によって発掘調査が行なわれ、中期末から後期にかけての敷石住居跡など、多くの遺構・遺物が発見された。しかし、この調査は、農道の拡幅に伴うもので遺跡の一部を調査したに過ぎない。前述した大門I・II遺跡と大浜遺跡でも中期の住居跡が確認されていて、この時期に大門の台地上に大規模な集落の存在が推定できる。現在、大門遺跡群の整理作業が進められ、この地域の様相が明らかにされる日も近い。後期の初期段階では称名寺式、前半では堀之内I式、中頃では堀之内II式・加曾利B式、末頃では安行I~II式などの土器が確認されているが、加曾利B式II・IIIから以降の遺跡は確認されていない。また、晚期



第3図 遺跡の位置および周辺の遺跡分布図 S=1/50,000

番号	遺跡名	時期
1	利坪	縄文（中）
2	用竹（神戸）	弥生（後）
3	用竹（越村）	縄文（早・中・後）
4	小伏（穴沢）	縄文（中）
5	向風1	縄文（前）
6	向風2	縄文（中・後）、奈良・平安
7	山風呂	縄文（前）
8	八木	縄文（中）
9	上野山1	縄文（後）
10	上野山古墳	古墳（後）
11	上野山2	縄文（中・後）、弥生
12	小倉	縄文（早・前）
13	大曾根	縄文（中）
14	南大浜	縄文（早・中・後）、弥生、平安
15	大浜	縄文（中・後）、平安
16	大門Ⅰ	縄文（早）
17	大門Ⅱ	縄文（中・後）、平安
18	仲山	弥生（中・後）
19	日野富士塚	縄文（早・前・中）
20	大倉要密跡	縄文（早・中・後）、弥生、平安
21	大倉	縄文（早・前・中）、平安
22	芦垣	縄文（早・前・中）、平安
23	斎瀬	縄文（早）
24	長峰跡	中世～

番号	遺跡名	時期
25	平島	縄文（早・中）
26	古屋戸	縄文（中）
27	中風呂	縄文（中）
28	音不巻	縄文（早・中）、古墳
29	野田尻2	縄文、古墳
30	野田尻1	縄文（中）、弥生（中）、平安
31	大野瀬	縄文
32	細田	縄文（中）
33	祇野	縄文（中）、平安
34	矢坪	縄文（前・中）
35	詫合坂	縄文（早・中）、弥生（後）
36	大日新田	縄文（中）
37	大日	縄文（中）
38	君越	縄文（中）、弥生（前）？
39	恋塚下	縄文（？）、弥生、古墳
40	中野原1	縄文（中）
41	中野原2	縄文（早）、古墳
42	中野原3	縄文（前）、弥生（中）
43	西瓜横	縄文（中）
44	仲大塚	縄文（早・前・中）、奈良
45	うはご	縄文（前・中）、平安
46	頃久保	縄文（早・前・中）
47	志沢	縄文（早・前・中）、奈良
48	穴銀谷	縄文（早・中）

番号	遺跡名	時期
49	上けぬき	縄文（前）、弥生（中・後）、奈良
50	大沢	縄文（中）、古墳、中世～
51	土橋	縄文（中）、奈良
52	日宿野	縄文（中・後）
53	谷後	縄文（中）
54	木原	縄文（早）
55	花坂	縄文（前・中）、古墳
56	田わき原	縄文、奈良
57	東大野	縄文（中）、平安
58	西大野	縄文（中）
59	高橋	縄文（中）
60	南木沢	縄文（中）
61	八ヶ沢	縄文（中）
62	松留	縄文（後）
63	牧野	縄文（中）、平安
64	当月	縄文（前・中）
65	川合	縄文（中）
66	千足	縄文
67	堀端下原	縄文（中・後）
68	片瀬腰	縄文（中）
69	下畑本郷	縄文（中・後）

第2表 周辺の遺跡一覧表

についても原・郷原遺跡、樋原中学校遺跡の2遺跡しか該当する遺跡がないのが現状である。

弥生時代では、他の時代に比べ全体的に遺跡の数が少ない。しかし、ここ数年の発掘調査の急増で、甲府盆地に限ってはその様相も明らかに成ってきてている。群内地域はどうかといえば、まだ市町村誌編纂の頃とそう大きな変化がない現状である。当町の弥生時代の遺跡は、縄文時代早期～中期にかけての分布に類似し、仲間川上流、扇山山麓の南斜面に分布する。上野原町誌では、富士山麓を経由し、相模川沿いに南下する人の動きを想定している。その南下先が、君越遺跡・恋塚下遺跡であり、上野原町で最も古い条痕系土器が資料として記されている。その後、中期～後期に位置づけられる野田尻・仲山遺跡（18）を経由して、大鶴・島田地区へ移行する。今回、調査された南大浜遺跡は野田尻Ⅰ遺跡（30）に近く、この地域で中期に集落が形成されていたことに資料を提供する結果となった。出土した中期中葉の壺は、過去には須和田式と分類され、現在では平沢式並行と呼ばれるものである。

古墳時代では、土師器・須恵器の包含地が町内で比較的色濃く確認され、集落遺跡の存在を匂わせている。しかし、その調査例は中野原Ⅲ・狐原遺跡と少なく、多分、現在の住居区域と多くが重なっているものと推定される。墳墓については、上野原河岸段丘の東に上野原古墳群がある。現在は、甲州街道の一里塚ともいわれている円墳が1基存在するのみで、その規模は直径約9m、高さ約2mで未調査のため詳細は不明である。また、大鶴地区鶴川の南側高台にある鶴川神社の裏手には、大小2基の正四角錐状の積み石塚がある。小さいほうの規模は、底面の一辺が約6.2m・高さ約1m、大きいほうは一辺約14m・四角錐の陵の長さが10mである。この長さは、高麗尺に換算でき、小さいほうの一辺が16尺、大きいほうは36尺となるらしい。このことから、この積み石塚を築いたものが高麗系の帰化人という仮説をたてているが、これもまた、詳細は不明である。最近、農作業の折りに古墳の石室が発見された（西ノ原古墳）。町内では初めての横穴式石室である。急な南斜面での開削のため石室の上部は取り除かれ、床面の敷石と奥壁を残すのみであったが、大集落の存在が推定されていた大野地区周辺からの発見で、扇山山麓に有力者のいたことが実証された事になる。

奈良・平安時代では、発掘調査によって集落の広がりが明らかに成りつつあるが、古墳時代同様、現在の生活域と重複していると考えられている。大門Ⅰ遺跡では、平安時代の住居跡が9軒調査され、土師器より須恵器の出土が多いことから、須恵器生産地の南多摩古窯跡群との関わりが注目されている。このように、縄文時代から関東系の要素が混ざり、上野原町独特の特色を作りだしている。また、中・近世では、今回の中央自動車道改築工事の一連で調査された長峰跡（24）があり、その本体は、高速道路北側とされている。

第3章 遺構と遺物

当遺跡では、縄文時代から平安時代までの遺構が検出された。上層の第1面は平安時代～弥生時代の確認面で、土坑54基・溝状遺構57基・弥生時代の壺1個が確認できた。この壺は、上野原町では出土例の少ない時期の遺物で注目される。中層の第2面は縄文時代中期頃と考えられ、集石3箇所・焼土範囲1箇所が検出できた。下層の第3面は縄文時代早期末頃で、陥し穴39基・土坑18基・風倒木痕13箇所が発見された。出土した遺物の量は、土器が2,408点・総量49.34kg、石器は99点・総量約51.47kgとなった。

以下、時代ごとに記述していく。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

・陥し穴・土坑・風倒木痕

第3面から検出された、陥し穴39基・土坑18基・風倒木痕13箇所で規模は紙面の都合上、表8に示すとおりである。この時期の地形は第5図に示した第1面と同様、西から東へ傾斜してその比高差は約4mを測る。陥し穴は、獣を捕獲するための手段としてつくらたものであり、穴の底面には、直径5cmほどの小さなものから直径20cmほどの大きさの穴がある。これは、先を尖らせた棒状の杭を埋設して、直接獣に致命傷を与えた後、逃げられないように隙間を狭くするために使用されたものと考えられている。検出された穴の数は、1つが10基、2つが12基、3つが2基、4つ以上が15基であった。1つのものは、底面のほぼ真ん中にあるものがほとんどで、穴もしっかりしていて大きめである。2つのものは、やはり、底面の中央に均等に配置されていた。3つのものは、底面の長軸にあわせて1列に配置されるものと、そうでないものがあった。4つ以上のものは、主柱穴のように中心に太いものを設置し、その周辺に細いものを並べたようにみえるもの多かった。主軸は、北東・南西方向が20基と一番多く、ついで北西・南東方向の15基、東・西方向の12基、北・南方向の7基となり、東・西方向から少し北へ向いているもの1基、北・南方向でやや西に傾くもの2基という結果となった。遺跡全体から見た土坑の配置は、5mほど間隔をおいて北東から南西を軸とする直線に並んでいるかに見える。そのグループの中に風倒木痕やその他の土坑も含まれているのである。これが、意図的に間隔をあけて設置しているのであれば、この向きに獣道があったのだろうか。また、土坑としたものの中にも、内側が袋状になるものもあり底面に穴は存在しないが、陥し穴の可能性もある。遺物は1点も出土しておらず、土坑の他に遺構も検出されなかつたが、台地南側に位置する大柄遺跡から同形態の陥し穴が多数発見されることや土壤の科学分析から、時期は大柄遺跡と同じ縄文時代早期末頃と考えている。

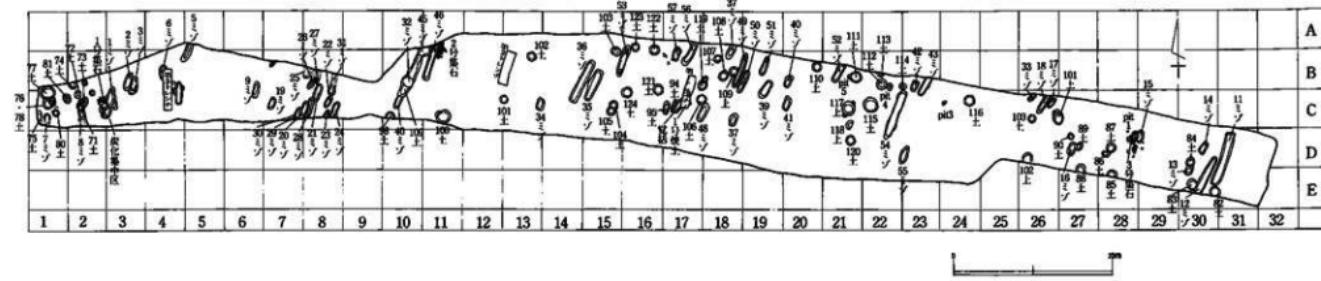
・集石遺構

集石遺構は第2面で検出された。調査区全体で3箇所、比較的離れて存在している。

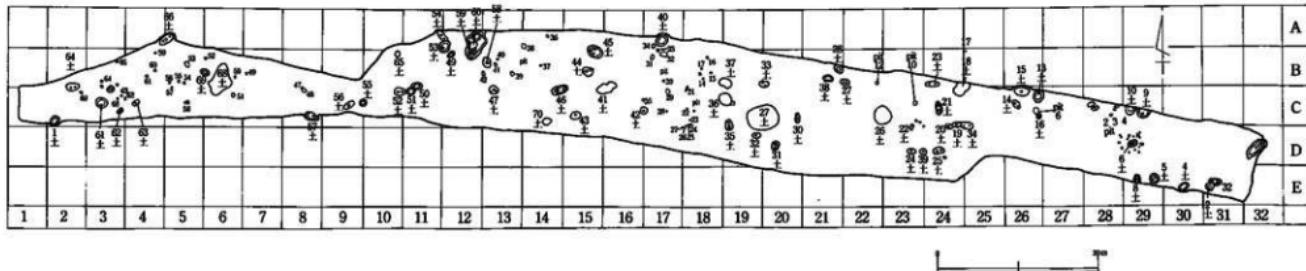
1号集石遺構は、長軸1.5m・短軸0.46～0.7m・深さ0.1mを測り、C-2グリッドに位置する。第1面からほどこんだ試掘坑から検出され、2号集石遺構から50mほど西に存在する。角張った自然礫を窪地に集めたような状態で底面は皿状である。礫の堆積も薄い。遺物は特に検出されなかった。

2号集石遺構は、長軸1.55m・短軸1.33m・深さ0.12mを測り、B-13～C-13グリッドに位置する。1号集石同様、自然礫を薄く並べた様な状態で、底面は皿状である。1号集石遺構からは約50m東に、3号集石遺構からは約100m西に存在する。遺物は特に検出されなかった。

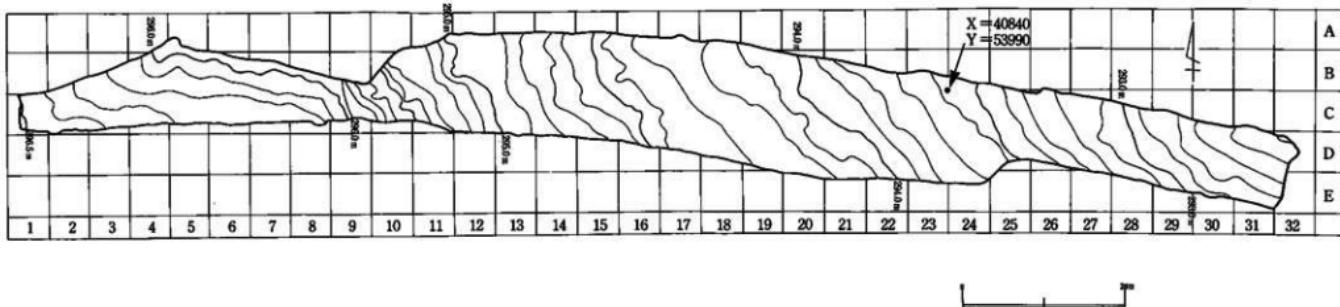
3号集石遺構は、長軸1.36m・短軸0.9m・深さ0.1mを測り、D-28～29グリッドに位置する。2号集石遺構から100mほど東に存在する。礫は1・2号集石遺構同様、自然礫を使用している。礫の直上を覆うように炭化物と思われるほど黒色の土壤の堆積があった。礫は多少焼けていた可能性がある。遺物は特に検出されなかった。時期は、土層の観察結果から縄文時代前期から中期頃と推定される。



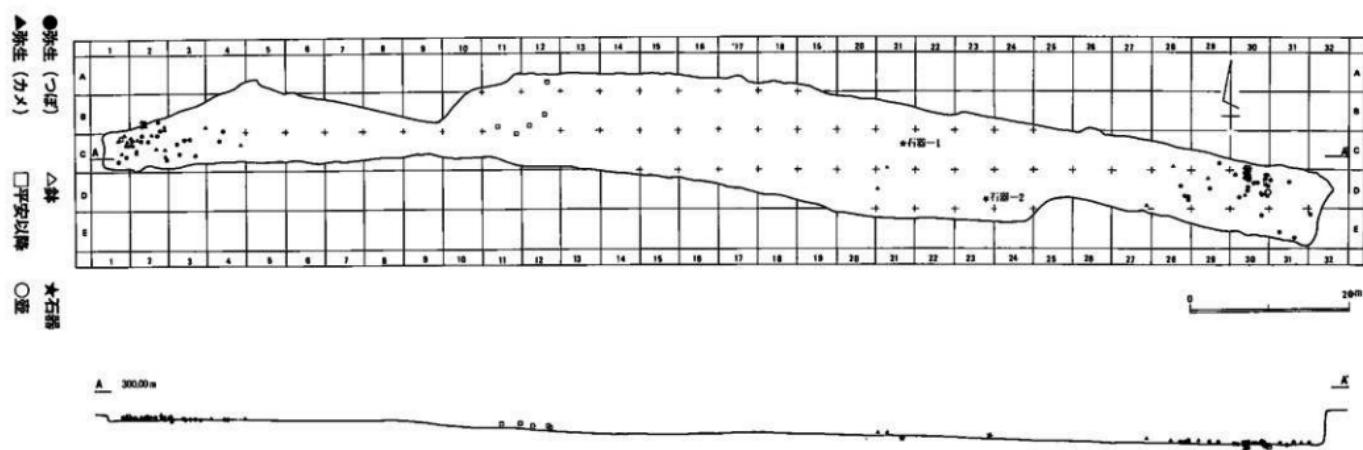
南大浜遺跡第1・第2面全体図



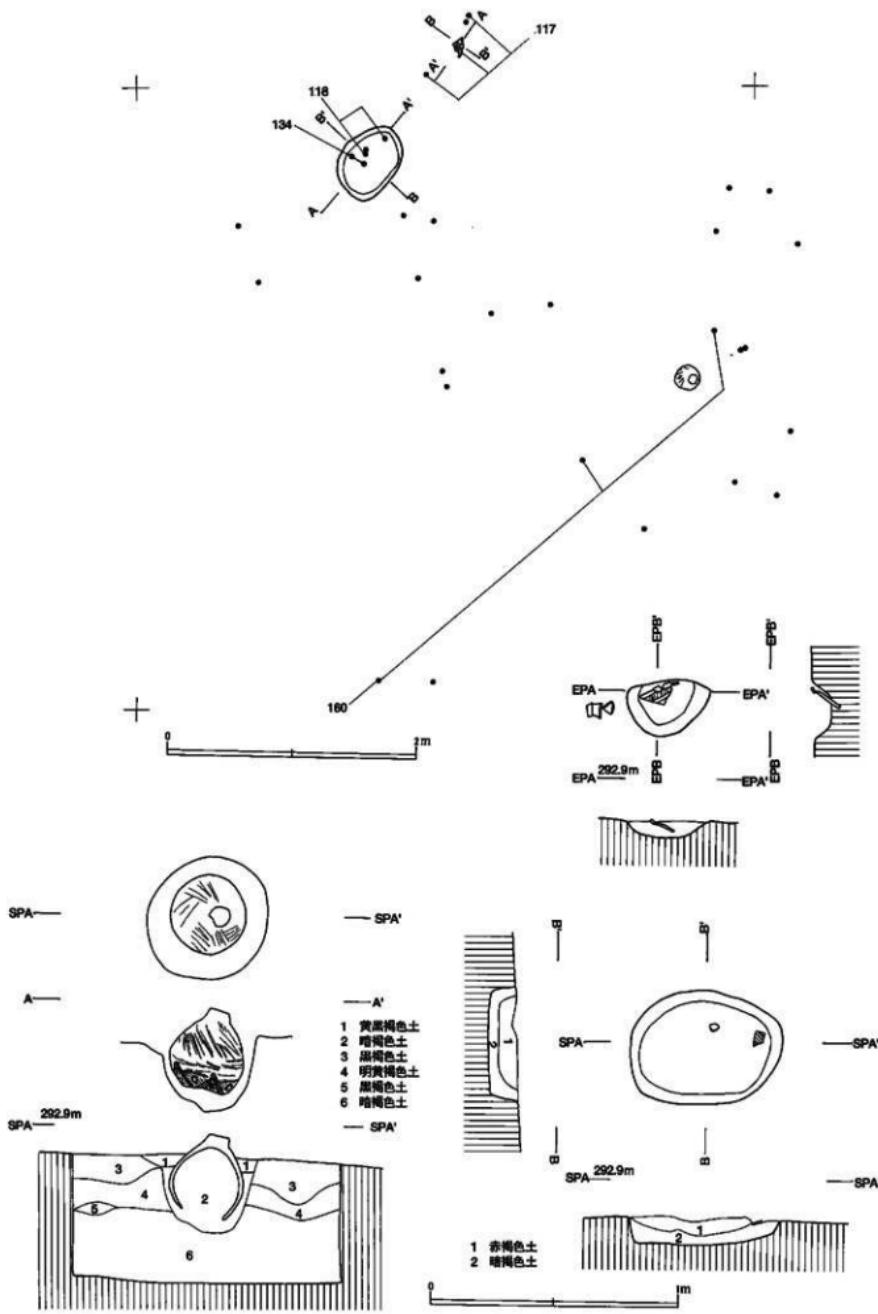
南大浜遺跡第3面全体図



第5図 南大浜遺跡第1調査面等高線図



第6図 遺物分布図



第7図 弥生土器接合図・微細図

・焼土範囲

焼土範囲は、試掘の際、第1トレンチ内において地表から1.6mの深さで確認されたもので、C-17グリッドに位置する。長径0.5m・短径0.3mの瓢箪形で、深さ0.55mを測るが、焼土自体の堆積は薄い。一つ北側のB-17グリッドでは、炭化材が平面的に若干観察ができ、火を焚いたそばに炭や灰を廃棄したとも想定できる。そうであれば、この焼土遺構は、一度限りの使用で、狩猟時の野営で使われたものかもしれない。遺物は特に検出されなかった。時期は集石遺構同様、土層の観察結果から縄文前期～中期頃と推定される。

・縄文時代の遺物

石器

第2面の調査時に、縄文時代草創期に相当する有舌尖頭器(201)が検出された。出土位置は第6図に示すように、C21グリッドから出土している。もちろん、これが発見された層が、縄文時代草創期ではあり得ないが、扇山山麓周辺に、より古い遺跡の存在が指摘されていることから、南大浜遺跡の周辺にも縄文時代草創期の遺跡が存在する可能性が出てきた。上野原町地内では、穴沢遺跡・岡山遺跡・仲大地遺跡について4点目の出土例である。大きさやその形状から小瀬ヶ沢型と思われる。また、これも、本来の出土地点とは異なるが、通称トロトロ石器とよばれる局部磨製異形石器(202)も1点検出された。表面に磨耗痕が認められ、先端部分が加工されている。出土地点は第6図を参照。この他、縄文時代中期から後期にかけての石器が多数出土している。特に、打製石斧は、その制作過程で出来る未完成品なども多く出土している。さらに、石器の石材として使用頻度の高いチャートの石核が2点出土していることも注目される。これら石器の出土位置を平面図におとしてみると、偶然かもしれないが、遺物の全く出土していない第3面の遺構が検出されている範囲と、第1面の石器が出土している範囲に共通点がみられる。つまり、遺構が検出されない空白の部分からは、石器も出土しないのである。このことは、少なくとも縄文時代早期末から弥生時代中期頃までの間には、地形や自然環境が変化していなかったことがいえるのではないだろうか。

縄文土器

縄文土器は前期から後期にかけて総数約2,300点、総量約46kgが出土した。ここでは、縄文時代前期を第1群、縄文時代中期を第2群、縄文時代後期を第3群に分類して記述する。なお、第2群に相当する遺物は、遺跡全体の出土量の三分の二をしめるため、第2群のa・b・cとさらに細分した。

第1群は縄文時代前期(1～9)にあたる。1～3は羽状縄文、4は繊維が混入されている。5～7は諸磯C式にあたり、8・9は諸磯式併行の北白川系の土器である。

第2群は縄文時代中期にあたり、遺跡全体から出土した多くの土器がこの時期に相当する。2a期の土器は藤内式をあてる(10～18)。2b期の遺物としては井戸尻期の16点を載せた(19～34)。2a・bは中部地域にその指標が示されており中期中葉に位置づけがされている。しかし、資料が少なく復元できないほど小さな破片ばかりであった。上野原町地城では関東圏の影響が強いと考えられるが、この時期に相当する土器は出土していない。本調査区中で、最も多く出土したのは曾利式期で2cとした(35～85)。曾利I・II式期の遺物はほとんどなく、多くがIII式期以降のものである。この土器も、復元可能なものが少なく断面実測のみである。53～59は有孔鋤付き土器の破片で、土器自体に孔を貫通させるものと鋤に貫通させるものとに分けられる。

第3群は縄文時代後期に該当する(86～110)。称名寺式土器が数点出土しているが、その多くは堀之内式期のものである。無文の土器が多く断面実測に耐えられる破片資料も少なかった。また、102～110は注口土器の破片である。

土製品

調査区から発見されたものは、土製円盤が3つのみである(111～113)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構といえるものは、再葬墓で使用されたと考えられる壺が出土した一帯で、浅い焼土遺構と鉢のように開く口縁部が出土している。壺は平安時代の遺構確認面と同じ面から、逆さの状態で発見された。その後、慎重に半裁しながら掘り進めていくと、頸部から底部まで完形な状態で検出された。この壺は、弥生時代中期千葉の須和田式並行の平沢式土器で、埼玉県から千葉県にかけて出土する土器に類似性がある。特に、千葉県常陸遺跡の方形周溝墓出土土器とは文様構成も類似しており、当地域の文化圏が、現在同様関東域に含まれていたことを示している。今回検出された壺は、方形周溝墓や墓壙から出土し、再葬墓として使用される例が多い。しかし、墓壙として明確な壠込みが無く、単独で逆位の状態と不自然な出土の仕方をしていることから、用途としては再葬墓に使用されたものであろうが、定位置の出土ではないといえる。しかし、再葬墓として使用された可能性は高く、土器内土壤の脂肪酸分析を試みた。(第4章第2節)

遺物は、第7図のとおり、疎らな分布を示し、接合関係も4ヶ所のみであった。しかし、破片資料が大半を占めるなかにあって、4点の復元実測ができた。116は、残存高30cm・胴部の最大幅30cmの丸い胴部をもっている。この時期の特徴とする細長い頸部を欠損しているが、胴部の文様は、太めの沈線で文様帯を区画し、繩文を充填している。胴部下は、横位と斜めの磨きが施されている。この時期の良好な資料は、神奈川県平沢北開土・千葉県天神前・埼玉県上敷免・栃木県出流原遺跡などがあげられる。117は地紋が繩文で、口縁から頸部にかけて2本の沈線が並行にめぐらされている。補修孔が1ヶ所あけられている。口縁部折り返しである。

調査区全体の弥生土器の分布状況を第6図に示したが、調査区の東西に別れて集中する傾向がある。そして、西側からは甕の破片が多く、東側からは116・117とともに壺の破片が多く出土している。接合関係は殆ど見られず、平面的に散布している程度である。中央自動車道を挟んで南側の南大浜遺跡では弥生式土器は確認されていないことから、調査されていない中央部分の調査が望まれる。

第3節 平安時代以降の遺構と遺物

円形土坑31基・円形土坑かもしれないもの15基・違う土坑3基・ピットのような小規模なもの5基の54基と、溝状遺構57条が検出された。円形土坑の検出される遺跡の多くは台地や丘陵上の立地で、奈良・平安時代を主体とする複合遺跡である。本遺跡も立地の上では例に漏れないが、遺構の出土状況では、円形土坑の他には溝状遺構しか検出されていない。このような性格の不明瞭な土坑の用途については、墓壙・貯蔵穴説などが主に想定されている。今回、土坑12・16・21・25・31・40・45・51号の8基で土坑内土壤のリン分析を試みた(第4章第1節)が、前述のような用途を決定する事実にはいたらなかった。また、45号土坑内出土の炭化材から年代を測定したところ640±200年という結果を得た。

溝状遺構は、北東-南西に主軸をもつものがほとんどである。なかでも45・46号と11・12号溝が最も長く、35・36号溝をふくめ2条対になった状態で検出され、その他の遺構を間隔をおいて区画しているようにも思える。しかし、2mほどのものでも接近している例も少なくはない。数本の溝が均等に配列されることもなく、規則性は感じられず、その性格もはっきりしない。また、溝状遺構としたもののなかでも、長椭円の土坑というべき物も含まれている。

遺物は、その多くが繩文土器であるが、若干の土師器・須恵器・灰釉陶器等が見られた。さらに遺構からの検出となると、以下に述べるのみである。77号土坑からは、須恵器甕の破片2点(196・198)と土師器甕の口縁部(184)が1点出土している。78号土坑からは須恵器が1点(194)が出土している。また、(40)号土坑からは割れ口にベンガラの付着した石器(199)が1点出土している。先端が磨耗している状態から擦り石のようにつかわれたものかもしれない。4号溝からは、文字の解説が不可能な銅鏡が出土した。27号溝からは角釘(200)が1点、36号溝からは灰釉陶器の破片(197)が1点出土しているだけである。すべて、復元するのも難しいほどの中小片であり、時期の特定は難しい。しかし、土坑の年代測定の結果では、時代が下っても840年となり9世紀後半を位置づけなければならないが、遺物の検証からは10世紀以降のものである。

第4章 自然科学分析

第1節 南大浜遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

南大浜遺跡は扇山山麓地、仲間川右岸の台地緩斜面部に位置する。本遺跡では、これまでにも発掘調査が行われ、再葬墓の可能性がある弥生時代中期の埋甕などが出土している。今回実施された発掘調査では、縄文時代早期の落とし穴、縄文時代前期から中期の集石・焼土、平安時代の円形土坑などが検出されている。

今回の自然科学分析調査では、縄文時代早期以降の本遺跡周辺の古植生に関する情報を得るために植物珪酸体分析を行う。この他、平安時代の円形土坑から出土した炭化材について炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定、また遺構の用途・性格を検討するためにリン分析を実施する。

1. 試料

調査区内部の層序は、下位にL1～L10に分層されるローム層が認められ、その上位がⅩ～Ⅰ層に分層されている（図1）。Ⅹ層より上位で3面ほど遺構検出面が確認されており、縄文時代早期の遺構検出面である第3面がⅩ層、縄文時代前～中期の遺構検出面である第2面がⅧ層下部、平安時代の遺構検出面である第1面がⅤ層とされている。

植物珪酸体分析は、A19グリッドとC21グリッドから採取された合計57点の土壤試料の内、Ⅴ層から採取された175-14-7、Ⅷ層から採取された175-14-12上、Ⅸ層で採取された175-14-14下、L2層で採取された175-14-15上の合計4点について実施する。

放射性炭素年代測定は、45号土坑から検出された炭化材から必要量を抽出して行う。また、これら炭化材を任意に3点選択して炭化材同定を行う。

リン分析は、12号土坑、16号土坑、21号土坑、25号土坑、31号土坑、40号土坑、45号土坑、51号土坑から採取された試料から14点選択して行う。なお、試料の詳細については結果とともに示す。

2. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250kHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出される植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎にそれぞれの総数を基數とする百分率で求める。

(2) 放射性炭素年代測定

・前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。次に濃硝酸を加えて煮沸する。室温まで冷却後、傾斜法により除去する。充分水で洗

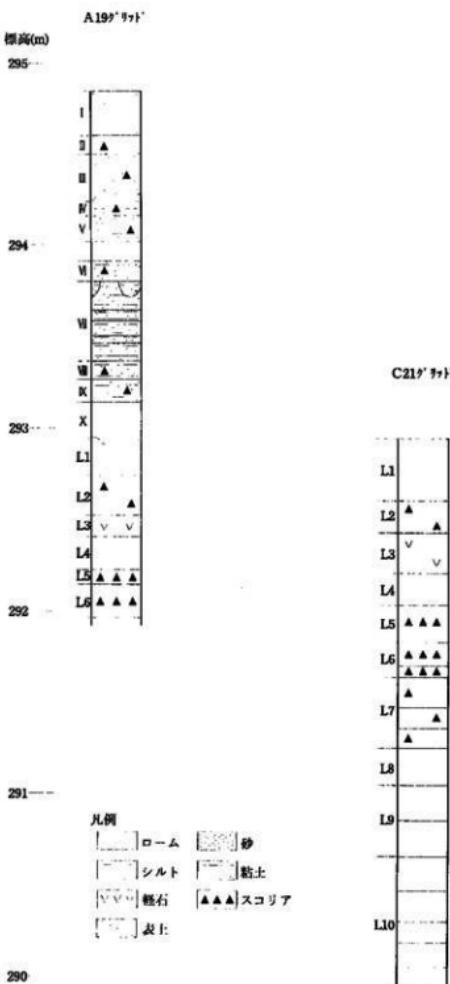


図8 南大浜遺跡の模式柱状図

淨した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400°Cに加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

・測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとする）にシンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とする。

・測定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間を行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダー

ド試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定する。

・計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

(3) 炭化材の樹種同定

木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(4) リン分析

土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）を参考に以下の操作工程で行う。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mLに定量してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）を求める。

3. 結果および考察

(1) 植物珪酸体の産状からみた台地上の古植生

結果を表3、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。特に、175-14-14下ではタケア科短細胞珪酸体やクマザサ属機動細胞珪酸体などが検出されるものの、検出個体数が少ない。

植物珪酸体群集は、175-14-15上と175-14-12上・175-14-7で大きく異なる。175-14-15上はクマザサ属の産出が目立ち、ネザサ節や他のタケア科、ウシクサ族（スキ属を含む）などが認められる。これに対して、175-14-12上と175-14-7はクマザサ属が減少し、ネザサ節やウシクサ族（スキ属を含む）が増加し、175-14-7ではイチゴツナギア科も認められる。

以上のような植物珪酸体群集の変遷から台地上のイネ科植物相は、次のように変化したとみられる。L2層堆積時の本遺跡周辺ではクマザサ属が繁茂し、ネザサ節や他のタケア科、ウシクサ族（スキ属を含む）などのイネ科植物も生育していたと思われる。また、畠層は検出個数が少なかったが、クマザサ属の機動細胞珪酸体の産状を考慮すれば、本層でもクマザサ属をはじめとするイネ科植物が生育していたと推測される。畠層は多量のローム粒子が含まれ、その影響で堆積物中の植物珪酸体の含量が稀釈され、検出個数が少なかった可能性がある。

縄文時代前期～中期とされるⅣ層と平安時代とされるV層になると、ネザサ節やスキ属を含むウシクサ族の割合の増加がうかがえる。また、V層堆積時にはイチゴツナギア科も生育するようになったと思われる。これらの種類の中でネザサ節は比較的開けた場所に生育する（室井、1960）。また、スキ属やイチゴツナギア科なども草原のような場所に生育しており、林床などで生育することがない。したがって、縄文時代前期～中期以降になると、台地上は

表3 南大浜遺跡の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	175-14		
		7	12上	14下
イネ科葉部短細胞珪酸体				
タケア科クマザサ属	27	19	1	154
タケア科ネザサ節	45	20	—	3
タケア科	79	153	24	58
ウシクサ族スキ属	16	1	—	—
イチゴツナギア科	4	—	—	—
不明キビ型	51	11	1	4
不明ヒゲシバ型	40	13	2	3
不明ダンチク型	26	5	—	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
タケア科クマザサ属	10	36	11	137
タケア科ネザサ節	36	33	1	3
タケア科	19	26	9	9
ウシクサ族	12	9	—	1
不明	35	35	2	2
合計		288	222	28
イネ科葉部短細胞珪酸体		227		
イネ科葉身機動細胞珪酸体		152		
総計		379		

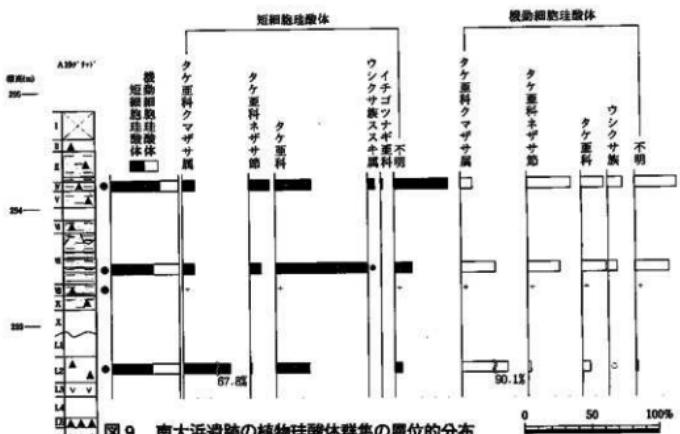


図9 南大浜遺跡の植物珪酸体群集の層位的分布

出現率は、イキ科葉部短細胞壁膜体、イキ科葉身假根細胞壁膜体の組数を基準として百分率で算出する。なお、●○は1%未満の種類、十はイキ科葉部短細胞壁膜体で200個未満、イキ科葉身假根細胞壁膜体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

草履のような開けた場所になったことが示唆される。

ところで、クマザサ属はネザサ節よりも冷温な地域に生育することが多い。杉山ほか(1992)によると、約1万年前以前は全国的にクマザサ属が優占する組成が見られ、以後はネザサ節やスキ属の産出が目立つ組成が見られるとされ、約1万年前を境に寒冷から温暖への環境変化があったと示されている。今回の調査結果もこれと同様な傾向が示され、杉山ほか(1992)が指摘する気候の温暖化に伴う変化を意味している可能性がある。

(2) 放射性炭素年代測定による円形土坑の年代観

放射性炭素年代測定結果を表2に示す。土坑内部から得られた炭化材は 640 ± 200 y. B. P.の測定値が得られる。測定値は、推定されている時代性よりも若干新しいが、誤差範囲を考慮すると調和的な結果であると考えられる。今後、他の遺構についても同様に測定を行い、統計学的に資料を蓄積することが重要であり、その上で再評価する課題と考える。

表4 南大浜遺跡の放射性炭素年代測定結果

採取遺構名	質	年代值	誤差		Lab. No.
			+	-	
45号土坑	炭化材	640	200	200	PAL-375

注1) 年代値：1950年を基点とした値

注2) 誤差: 検定誤差 $2\sigma_{\text{g}}$ (測定値の95%が入る範囲) を年代値に換算した値

注3) PAI: パリノ・サニヴェイ株式会社で測定。

(3) 凹形土坑から出土した炭化材の種類

樹化材は、いずれも落葉広葉樹で、1点がカエデ属、2点がケヤキに同定される。

本土坑内からは少ないながらも焼土が認められるが、炭化材の用途に関する詳細は現時点で不明とされる。しかし、炭化していることから比熱を受けていることは明らかである。参考ではあるが、ケヤキとカエデ属は燃料材としても利用される場合もあるが、燃料材として特に優良という種類ではない。また、本土坑の炭化材には複数種類利用されていることから、周辺で生育していたものが利用されたと考えられる。なお、各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

埋孔材で孔周部は1~2列、孔周外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接續・斜方向の紋様をなす。

道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~10細胞幅、1~30細胞高。しばしば結晶を含む。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った橢円形、単独および2~3個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

(4) リン分析からみた円形土坑の用途推定

結果を表5に示す。分析試料は土性がいずれもCL(埴塚土)であり、やや粘土質な土壤である。また、いずれの試料も土色の黒色味が強いことから、腐植含量が高いものと推察され、リン酸の保持力が強く、かつ植物遺体に由来するリン酸が多く存在するものと判断される。各土坑のリン酸含量は、4.23~4.80P₂O₅mg/gの範囲にあり比較的高い。しかし、リン酸含量の平均値は、4.63P₂O₅mg/gであり、また各土坑間での変動が小さく(標準偏差0.16、分散0.03)、有意差が認められない。

表5 南大浜遺跡のリン分析結果

試験名	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)
12号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.43
16号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.70
21号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.63
	No.1	10VR1.7/1 黒色	4.54
	No.2	10VR1.7/1 黒色	4.25
	No.5	10VR1.7/1 黒色	4.25
25号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.78
31号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.80
	No.1	10VR1.7/1 黒色	4.78
	No.2	10VR1.7/1 黒色	4.79
	No.2	10VR1.7/1 黒色	4.79
	No.4	10VR1.7/1 黒色	4.73
	No.5	10VR1.7/1 黒色	4.68
40号土坑	CL	10VR1.7/1 黒色	4.72
45号土坑	焼土サンプル	10VR1.7/1 黒色	4.67
51号土坑	CL	10VR2.1/1 黒色	4.69

注1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

注2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。

CL... 塩塚土(粘土15~25%、シルト20~45%、砂3~65%)

土壤に通常含有されるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、次のような調査例がある。Bowen (1983)の調査では中央値が2.0P₂O₅mg/g、Bolt・Bruggenwert (1980)では通常の含量範囲が1.0~2.5P₂O₅mg/g、川崎ほか (1991)ではリン酸含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P₂O₅mg/g、既耕地で5.5P₂O₅mg/gとされる。また、天野ほか (1991)では多数の土壤を分析した結果からリン酸の天然賦存量は2.7P₂O₅mg/g以下と推定している。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一している。これらの事例で推定される土壤中のリン酸の天然賦存量は高く見積もっても3.0P₂O₅mg/g以下と考えられる。すなわち、この値を著しく越える土壤では外的要因によるリン酸の富化が指摘できる。これらの調査結果と、先に弥生時代の土坑埋積物を対象とした調査で得られたリン酸含量から、本遺跡内土壤の平均的なリン酸含量は2.00±1.00P₂O₅mg/g(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)であると推定される。

今回の分析調査では、いずれの試料も3.0P₂O₅mg/gを超える値が得られており、リン酸が富化している可能性が示唆される。今回検出された円形土坑が仮に墓坑であるとすれば、人為的な埋め戻しが考えられる。しかし、分析対象とされた各土坑の覆土は單一層であるか、複数層に分層されていても自然埋積の様態を示すと思われる。また、土色から推定すると腐植含量が高いと予測され、植物遺体に由来するリン酸が富化した可能性も考えられる。今後は腐植含量の測定を行い確認することが望まれる。以上のように今回のリン酸分析の結果は、土坑が墓坑として利用されていたと断言できず、他の用途として利用されていた可能性もある。

第2節 南大浜遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子・長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナット種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。⁽⁴⁾

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量とともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

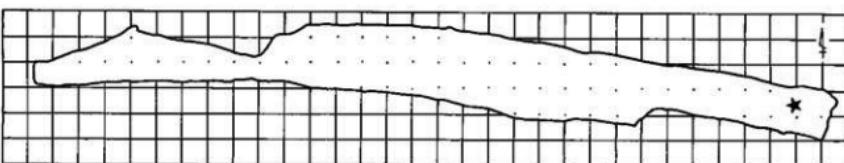
このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、南大浜遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

1. 土器・土壤・紐状物質試料

山梨県北都留郡上野原町に所在する南大浜遺跡から出土した、弥生時代中期後半のものと推定されている土器と土器内土壤試料を分析した。遺跡内での土器出土地点および土器内の試料採取地点を図10-1～10-1に示す。試料No1は土器そのもの、No2は土器内下部に残っていた土壤すべて、No3は土器内底部に貼りつくようにして残っていた紐状物質である。

2. 残存脂肪の抽出

土器試料2582 g、土壤試料404 g、紐状物質試料 2 g に、土器試料と紐状物質試料については試料が浸漬する量、土壤試料については3倍量のクロロホルム-メタノール（2:1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波



第10図-1 南大浜遺跡弥生土器出土位置



第10図-2 サンプル採取位置

処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表6に示す。抽出率は土器試料が0.0011%、土壤試料が0.0119%、紐状物質試料が0.0879%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壤・石器・土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%に比べ、土器試料はその範囲内ではあるが少なめ、土壤試料はほぼその範囲内、紐状物質試料は非常に高く土壤試料の約7倍もあった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアルギリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアルギリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中に2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサンーエチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。^[3]

残存脂肪の脂肪酸組成を図11に示す。残存脂肪から9種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中の脂肪酸組成パターンを見ると試料No.1とNo.2はほぼ同一、No.3は全く別なパターンであった。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、主要な脂肪酸が試料No.1とNo.2ではパルミチン酸、No.3ではオレイン酸とリノール酸であった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。ステアリン酸は動物性脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級飽和脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No.1とNo.2で約28%と34%、No.3で約3%であった。通常の遺跡出土土壤

表6 試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器	2582.0	27.8	0.0011
2	土器内土壤	404.1	48.2	0.0119
3	土器内紐状物質	1.8	1.6	0.0879

表7 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	21.61	14.61	1.48
2	6.43	15.89	0.40
3	9.25	26.90	0.34

中の高級飽和脂肪酸含有率は約4~10%であるので、試料No.1とNo.2の高級飽和脂肪酸含有量は非常に多く、No.3のそれは非常に少なかった。高級飽和脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合がある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、南大浜遺跡の土器試料と土器内土壤試料では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、高級飽和脂肪酸も非常に多く含まれており、紐状物質試料では主要な脂肪酸がオレイン酸とリノール酸でほぼ同量含まれており、高級飽和脂肪酸は非常に少しあ含まれていないことがわかった。

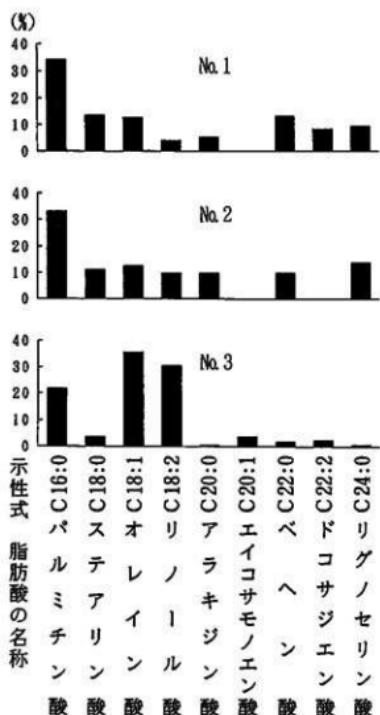


図11 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

通常の遺跡出土土壤の植物腐植土中でよりも少なめであったが、その中では試料No.3に最も多かった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペスチロール、スチグマステロールは、すべての試料中にカンペスチロールが約4~11%、スチグマステロールが約5~8%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはカンペスチロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中のカンペスチロール、スチグマステロール含有量はほぼ通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであったが、その中ではカンペスチロールが試料No.1とNo.3で多めで、スチグマステロールが試料No.3で多めであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約1~2%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはエルゴステロールは数%分布している。従って、この程度の量は土壤微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1とNo.2に3%前後、No.3に約8%分布していた。コプロスタノールは一般的な遺跡出土土壤中では分布していくても1~2%くらいで、通常はほとんど検出されない。また、コプロスタノールの分布により試料中の哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。今回は試料No.3にコプロスタノールが約8%含まれてはいたが、それらの判定はできなかつた。しかし、コプロスタノールがかなり多量に含まれているということは、試料No.3には哺乳動物の腸や糞便由来の脂肪が残存している可能性があること示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壤で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8~23.5である。⁽¹⁷⁾ 試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比は試料No.1が0.8以上、No.2とNo.3が0.6以下であった。このことは試料No.1には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性が高い。

以上、南大浜遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は動物由来のコレステロールが土器試料に非常に多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールが紐状物質試料にかなり多く含まれている他は、すべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植と並みか少なめにしか含まれていないことがわかつた。コレステロールとシトステロールの分布比は土器試料が指標値の0.8以上を示し、この試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性が高いことがわかつた。コレステロール含有量を考え合わせると脂肪酸分析で非常に多く含まれていた高級飽和脂肪酸は、土器試料は動物に、土器内土壤試料は植物由来すると推測される。土器外から採取した対照土壤試料があれば、土器や土器内土壤試料と比較することによって高級飽和脂肪酸の由来をより精確に判定することが可能となる。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ山梨県内の遺跡で、出土した配石遺構に残存する脂肪は大半が植物腐植土である中に高等動物の骨油に類する脂肪がわずかに残存する場合のものに類似していると判定した酒呑場遺跡、出土した埋甕や土坑に残存する脂肪は一部はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料もしくはヒトの胎盤試料と類似し、他の一部はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料と類似していると判定した。前述の酒呑場遺跡の試料とは異なる時期に分析した酒呑場遺跡、出土したカメに残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪、またヒトの胎盤の脂肪と類似し、出土した埋甕に残存する脂肪はヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油と類似していると判定した海道前C遺跡、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡、出土土壤を土壤墓と判定した

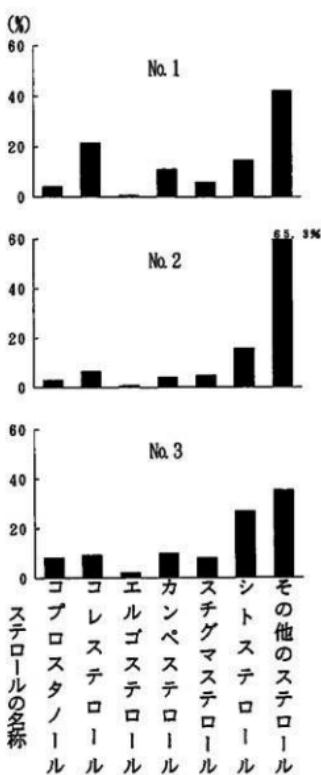


図12 試料中に残存する脂肪のステロール組成

兵庫県寺田遺跡¹⁴⁰、出土土壌を再葬墓と判定した宮城県沼戸遺跡¹⁴¹、ヒトの体脂肪、ヒトの骨油、ヒトの胎盤試料に残存する脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から出土状況を考慮して類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図13である。

図からわかるように、南大浜遺跡の試料No.1とNo.2は海道前C遺跡、酒呑場遺跡の試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた、南大浜遺跡の試料No.3は単独でG群を形成した。他の対照試料はB群～F群を形成した。これらの群のうちA～C群は相関行列距離で約0.1以内の所にありよく類似しており、D群ともやや類似していた。G群は相関行列距離的に近い所に類似する群がなかった。

以上、南大浜遺跡の土器試料と土器内土壤試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの胎盤の脂肪と類似していることがわかった。紐状物質試料に残存する脂肪は相関行列距離的に近い所に類似する試料がなく、特定することができなかつた。この物質は胎盤、体脂肪、骨などの遺物ではない、特異なものであろうと推測される。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキシン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた種特異性相関を図14に示す。図からわかるように、南大浜遺跡の試料No.1とNo.2は第1象限内でA群を、No.3は第3象限内でG群を形成した。A群の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器、胎盤等の特殊な部分に由来し、G群のそれは植物腐植土に由来することを示唆している。

以上、南大浜遺跡の土器試料と土器内土壤試料に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、臓器、胎盤等の特殊な部分に由来し、紐状物質試料に残存する脂肪は植物腐植土に由来することがわかった。

7. 総括

南大浜遺跡から出土した土器の性格を判定するために、土器そのものと土器内土壤試料、紐状物質試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、土器試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの胎盤の脂肪と類似していることがわかった。土器内底部にあった紐状物質試料に残存する脂肪は特定することができなかつたが、動物由来のコレステロールが少し多めで、哺乳動物由来のコプロスタノールはかなり多く含まれているので、臍帯（ヘソの緒）など何か特殊なものである可能性も考えられる、土器の大きさや残存する脂肪、またこれまでに胎衣糞にはコプロスタノールが残存している場合があることも考え合わすと、土器内には新生児、胎衣、臍帯などのいずれかを入れた可能性も推測される。ヒト遺体かヒト胎盤かを正確に判定するには、ヒト赤血球膜に分布する血液型糖脂質群を用いたり、ヒト胎盤に特有な糖脂質群ガングリオンドの1つであるG1やヒト胎盤に多く分布するGM1等の糖脂質群を用いた免疫反応を用いて確認する必要がある。

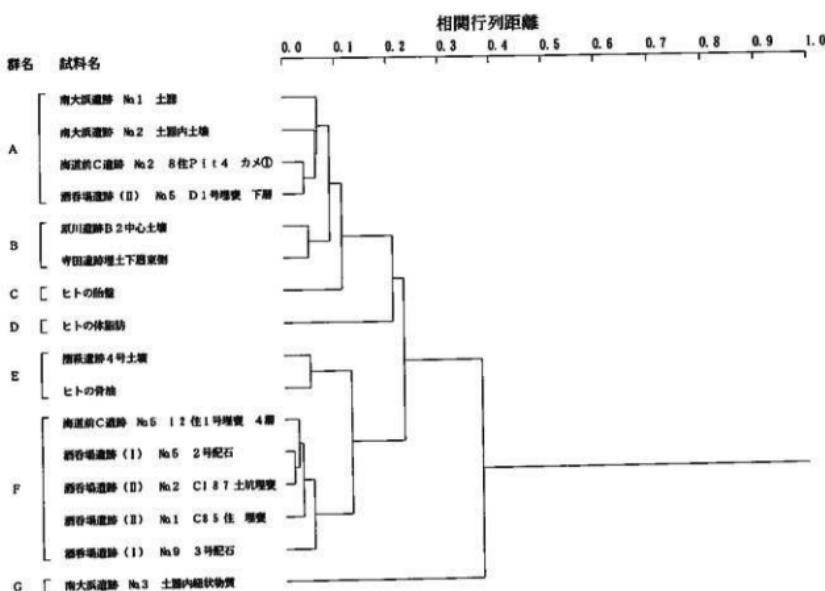


図13 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

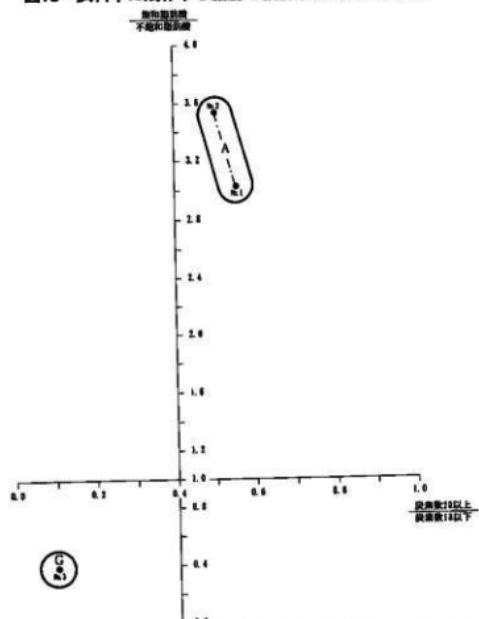


図14 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

参考文献

- (1) R.C.A.Rottlander and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」、『Archaeo Physika』、10卷, 1979, pp260.
- (2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」、『Nature』、292卷, 1981, pp146.
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäß-inhalte」、『Naturwissenschaften』、70卷, 1983, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」、「歴史公論」、第10卷（6）、1984, pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.』、358卷、1977, pp1439.
- (6) 中野益男 : 「残留脂肪酸による古代復元」、「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」、田中 琢、佐原 真緒、クバプロ、1995, pp148.
- (7) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畠 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢:「古代遺跡に残存する脂質の分析」、「脂質生化学研究」、第26卷、1984, pp40.
- (8) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、「真脇遺跡」、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986, pp401.
- (9) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子 : 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、「ヘロカルウス遺跡」、北海道文化財研究所調査報告書第3集、1987, pp191.
- (10) 中野益男、中野寛子、長田正宏 : 「酒呑場遺跡から出土した配石造構に残存する脂肪の分析」、「酒呑場遺跡（第1・2次）」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第135集, 山梨県教育委員会・山梨県農務部、1997, pp243.
- (11) 中野益男、中野寛子、長田正宏 : 「酒呑場遺跡から出土した遺物・造構に残存する脂肪の分析」、「酒呑場遺跡（第1・2次）」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第135集, 山梨県教育委員会・山梨県農務部、1997, pp249.
- (12) 中野益男、中野寛子、長田正宏 : 「海道前C遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」、「未発表」、山梨県埋蔵文化財センター
- (13) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏 : 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、「原川遺跡I」、静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第17集, 関静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988, pp79.
- (14) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏 : 「寺田遺跡土壤墓状造構に残存する脂肪の分析」、「未発表」、兵庫県芦屋市教育委員会。
- (15) 中野益男、長田正宏、福島道広、中野寛子 : 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、「摺萩遺跡」、宮城県文化財調査報告書第132集, 宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課、1990, pp929.

第5章 まとめ

本調査区は、遺跡の北端からやや内側の1,600m程で、縄文時代早期末頃の陥し穴など土坑70基、平安時代以降の土坑54基、溝状遺構57状が発見された。面積的には、遺跡の極一部を調査したに過ぎないが、町内の遺跡のなかでは、極めて珍しい縄文時代草創期の有舌尖頭器や弥生時代中期の壺等が出土している。また、分断された南側の斜面も、1998（平成10）年2月～9月にかけて工業団地建設予定地の事前調査がなされ、縄文時代中期後半の竪穴住居跡19軒・中期末の柄鏡形敷石住居跡2軒・後期の柄鏡形敷石住居跡2軒・古墳時代の竪穴住居跡1軒・土坑28基・炉跡2基・焼土遺構などが発見されている。この2ヵ所の調査は遺跡の南斜面一帯と北斜面の一部を調査したもので、その中心は中央自動車道と町道によって分断された段丘の最高位で、過去に個人住宅が建設された時、沢山の土器が出土したと言われている。

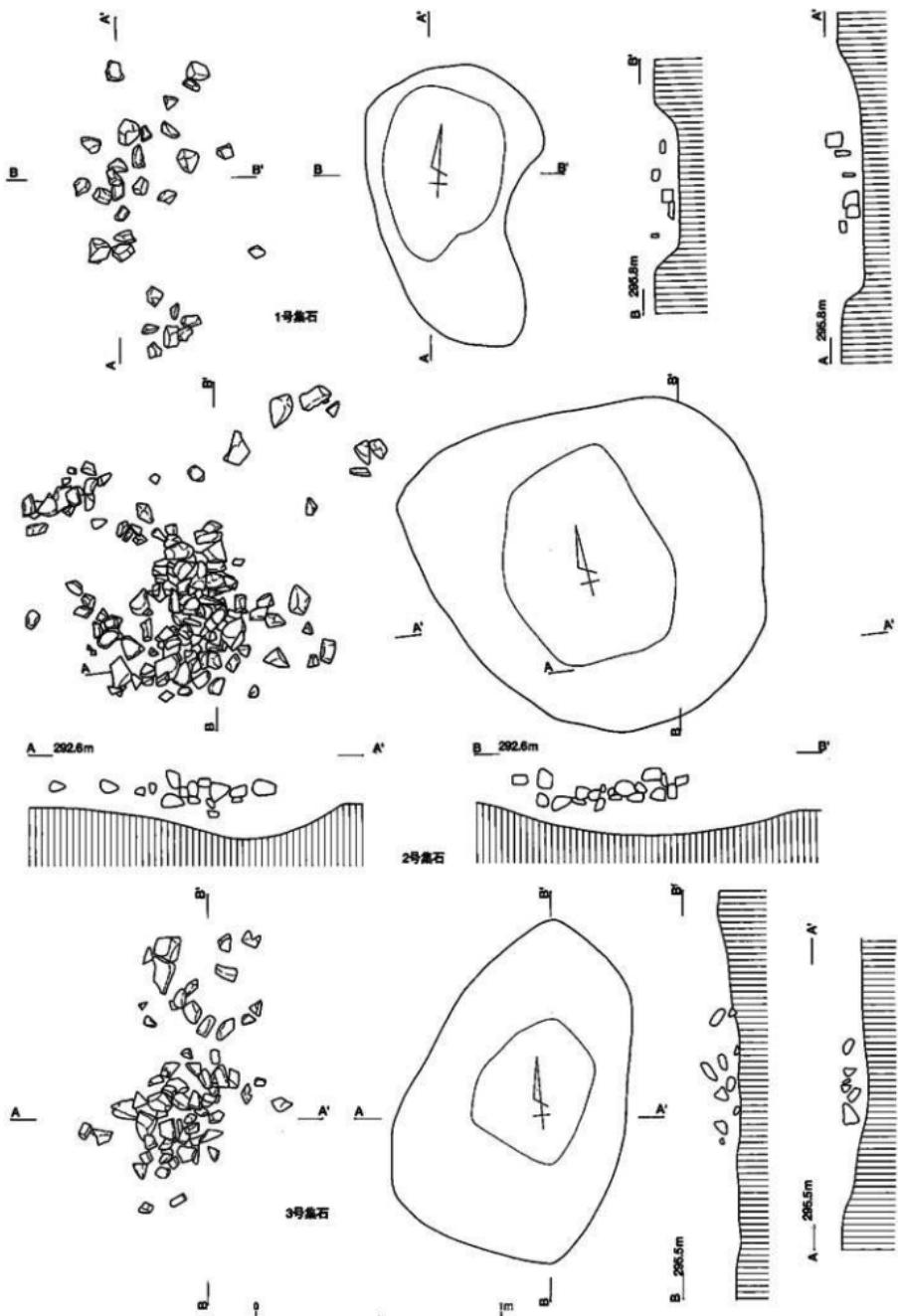
今回の調査では、南側斜面と違い集落跡的な要素を含む遺構は検出されず、時期的な盛衰に擦れが生じている。本調査で特筆すべき遺構は、第1面で発見された弥生時代の壺と第3面で検出された陥し穴群といえる。まず弥生時代の遺物が確認されたのは貴重な発見で、特に再葬墓として使用された可能性の高い壺は、調査区の西側から発見された。弥生時代中期中葉の遺跡は県内でも珍しく、この時期に特徴的な細長い頸部を欠いてはいるものの肩部から底部まで完形な状態で出土したのは初めてである。中期中葉の遺跡は、集落跡がほとんど発見されおらず、再葬墓が単独で発見される例のほうが多い。発見された壺は、残念なことに逆位で出土したことや掘り方が明確ではないことから本来埋葬されたであろう場所とは別の場所にあったものと考えられ、再葬墓として断定する要因が欠けている。しかし、壺が1つだけで移動させられるとは考えにくく、また、周辺に同時代の遺物が疎らではあるが出土している状態から、近くに墓域群がある可能性は高い。集落と墓域の周辺では出土する遺物に偏りがあることが指摘されており、分布図を作成したところ、調査区西側では壺の破片が多く、東側では壺の破片が多く見られるという興味深い結果がえられた。遺跡の高位面では集落が、低位面では墓域が形成されるすれば、高速道路を含めて最高位の民家がある草むらに弥生時代中期の集落を想定できるかもしれない。

次に陥し穴群であるが、遺跡周辺の古植生について堆積土壤から分析をおこなったところ、縄文時代前期から中期以降の遺跡周辺の台地上が草原のような開けた場所であった可能性が示唆された。陥し穴群が調査された第3面では、遺物が1点も出土せず時期を限定する資料に乏しい。しかし、前述の土壤の分析や、近接する大門遺跡から発見された陥し穴群の様相に類似することから縄文時代早期末から前期頃につくられたものと考えられる。この地は、北側に仲間川が流れ、東西を沢に挟まれるという立地をしており、陥し穴は水場に近い獣道に沿っては検出されるという論提に当てはまる。

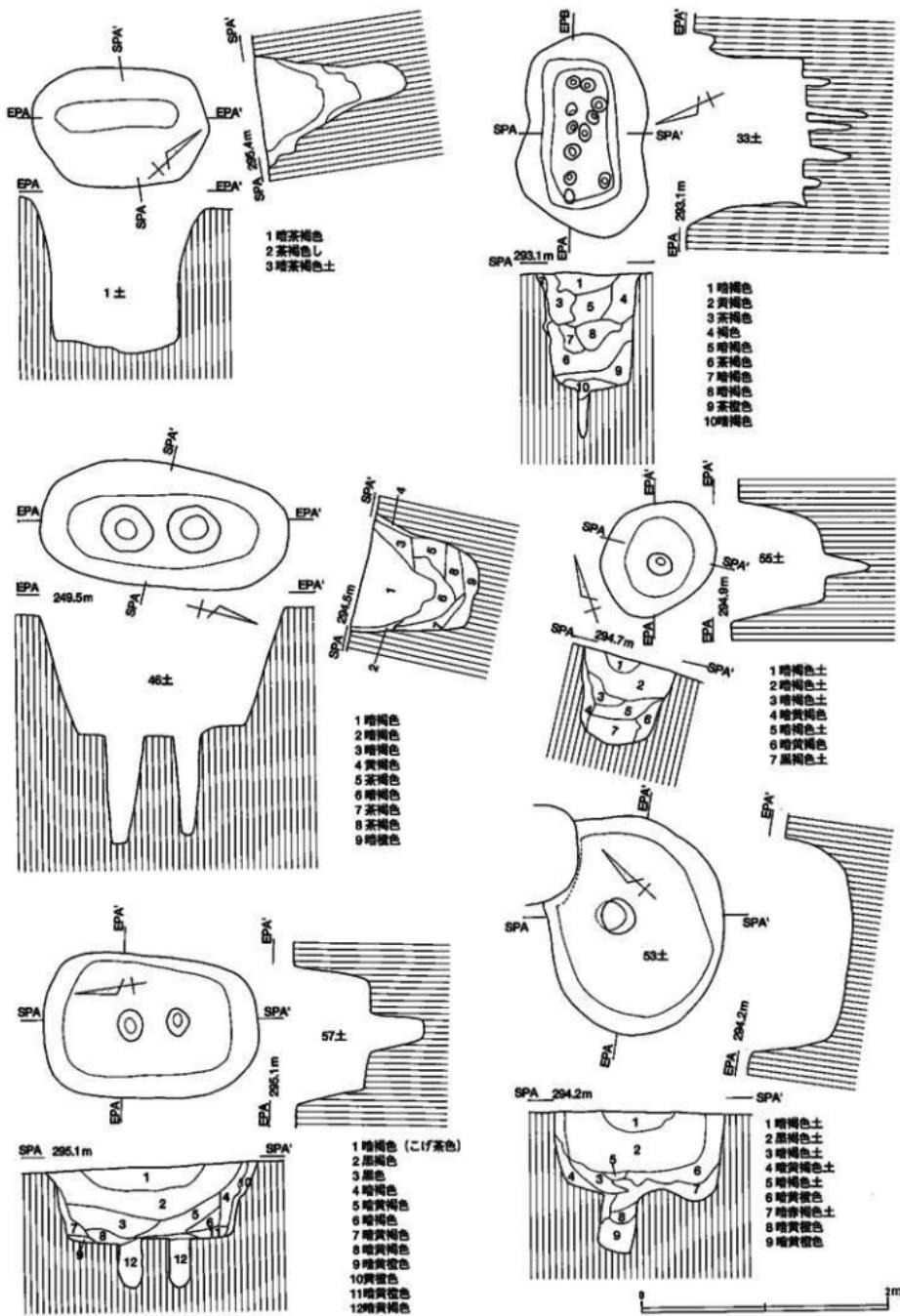
このように、今回の南大浜遺跡の調査では、遺跡全体の北端の一部を調査したのみであるが、縄文時代草創期から平安時代頃まで様々な遺構・遺物が発見された。この土地を活用した人々が住む場所は特定できではないが、狩猟をおこない、墓をつくった人々は、近くでその生活を営んでいたはずである。今後、取り残されている遺跡中央部分の調査がなされれば、その全容も明らかになることであろう。また、大門遺跡群として周知される大門Ⅰ・Ⅱ、大浜遺跡との関係についても、検討する必要があるであろう。

参考文献

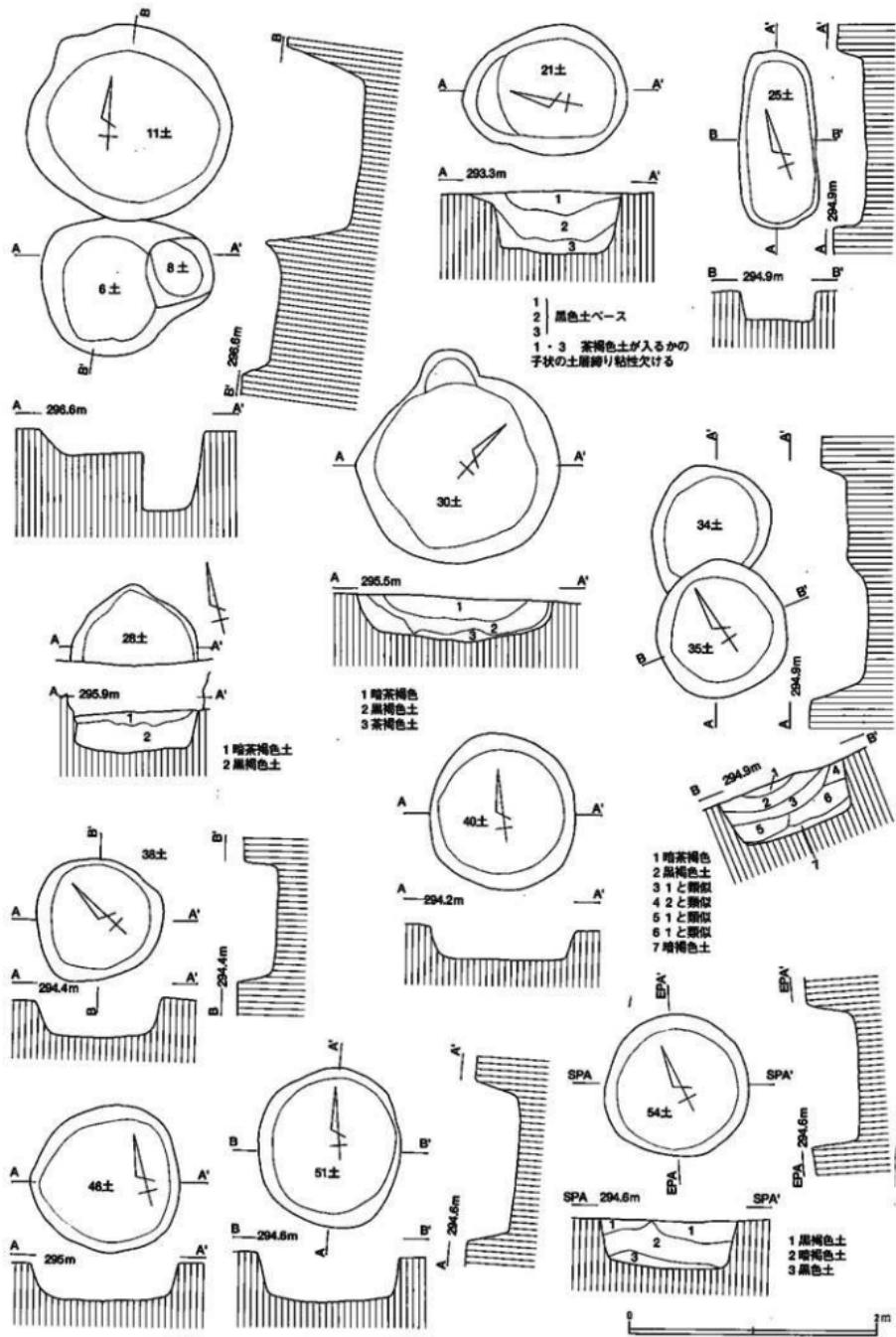
- 市川 正史 1968 「円形土坑について」 『神奈川考古』 第22号 神奈川考古同人会
今村 啓爾 1983 「陥穴(おとし穴)」 『縄文文化の研究』2 雄山閣出版
石川日出志 1987 「9 墓地-10 再葬墓」 『弥生文化の研究』8 雄山閣出版
鈴木道之助 1991 「石器入門辞典-縄文-」 柏書房
大川 清・鈴木 公雄・工楽 普通 1996 「日本土器辞典」 雄山閣出版



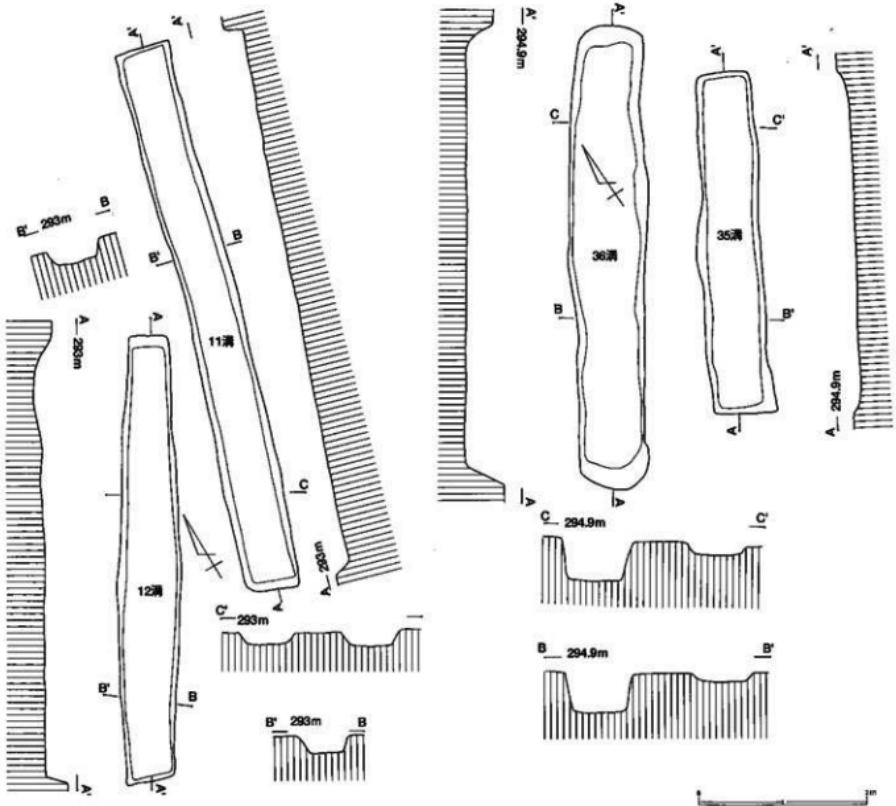
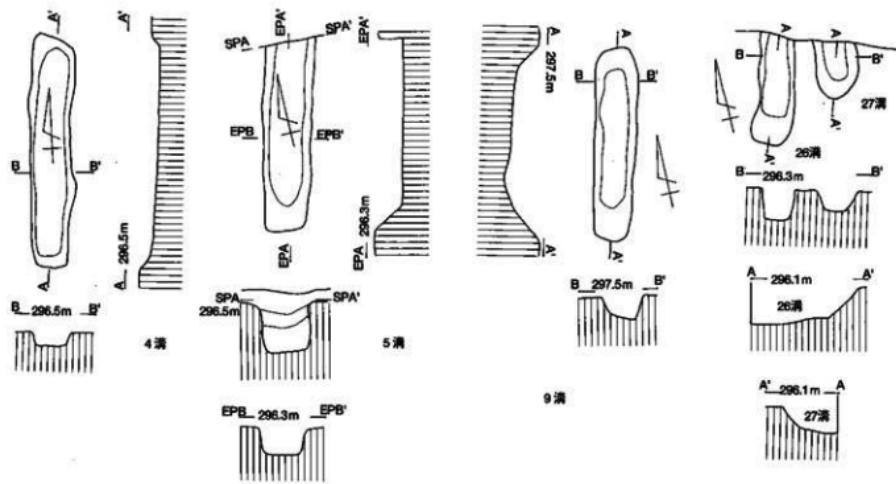
第15図 造構1 (集石造構)



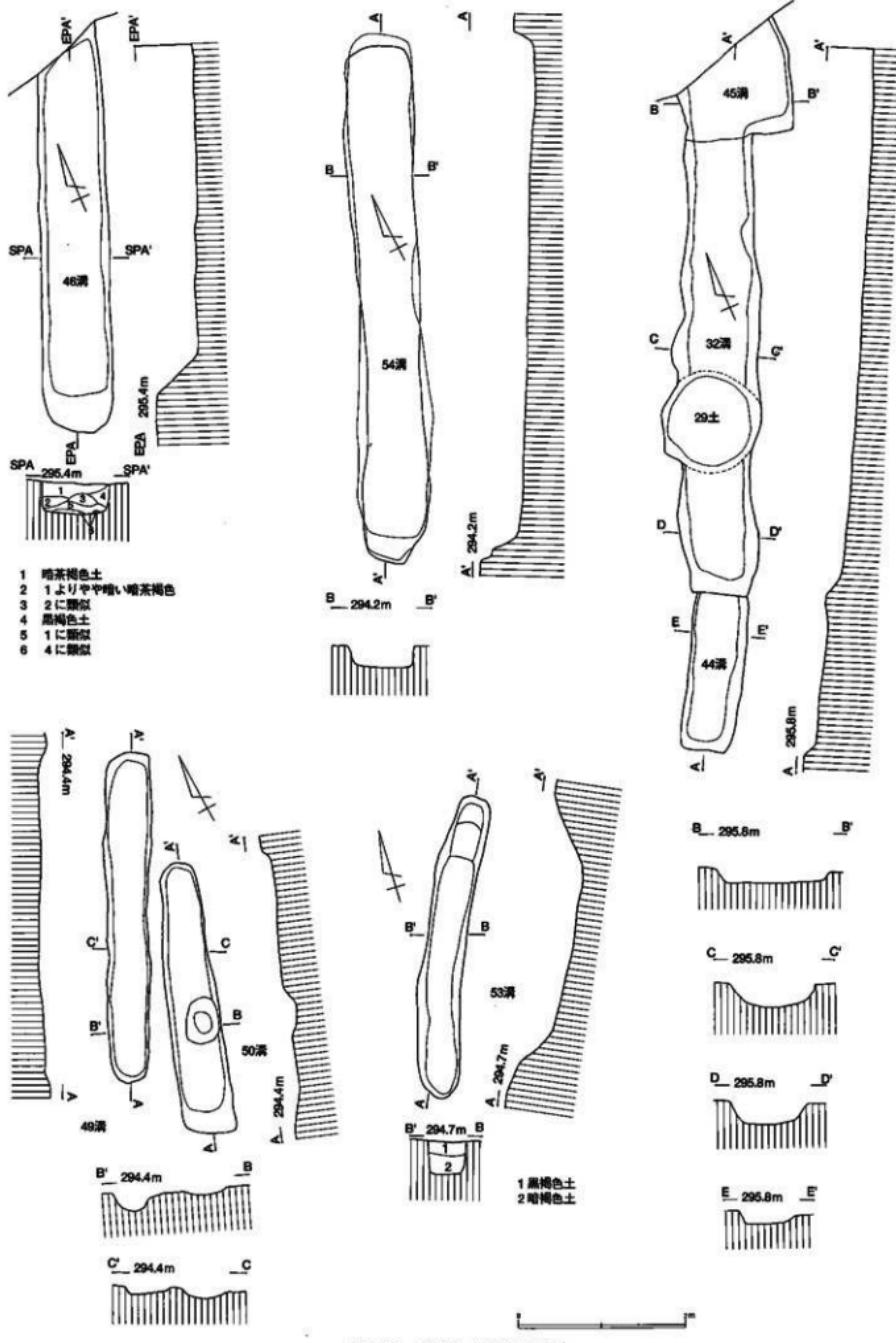
第16図 造構2(陥し穴)



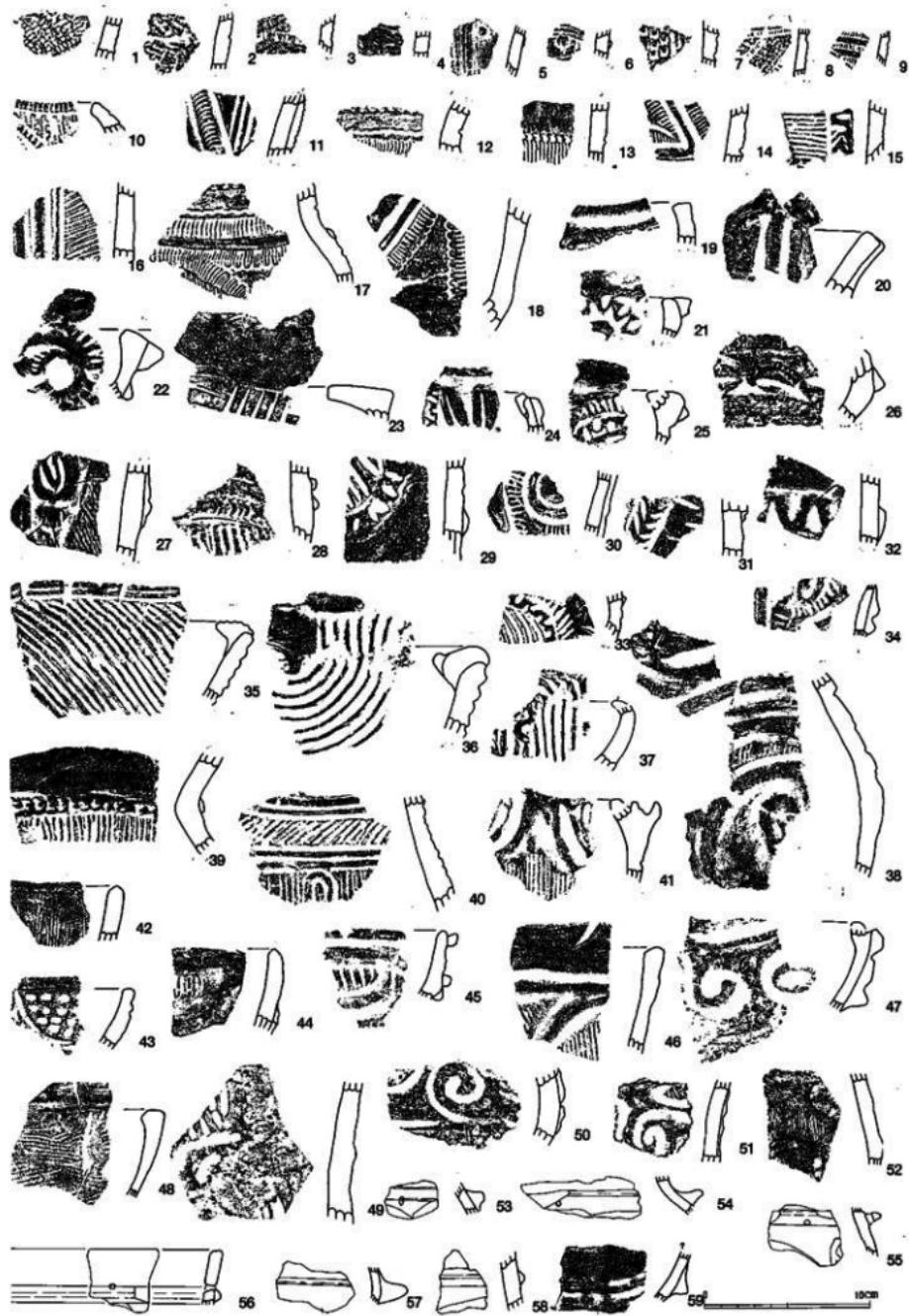
第17図 遺構3 (円形土坑)



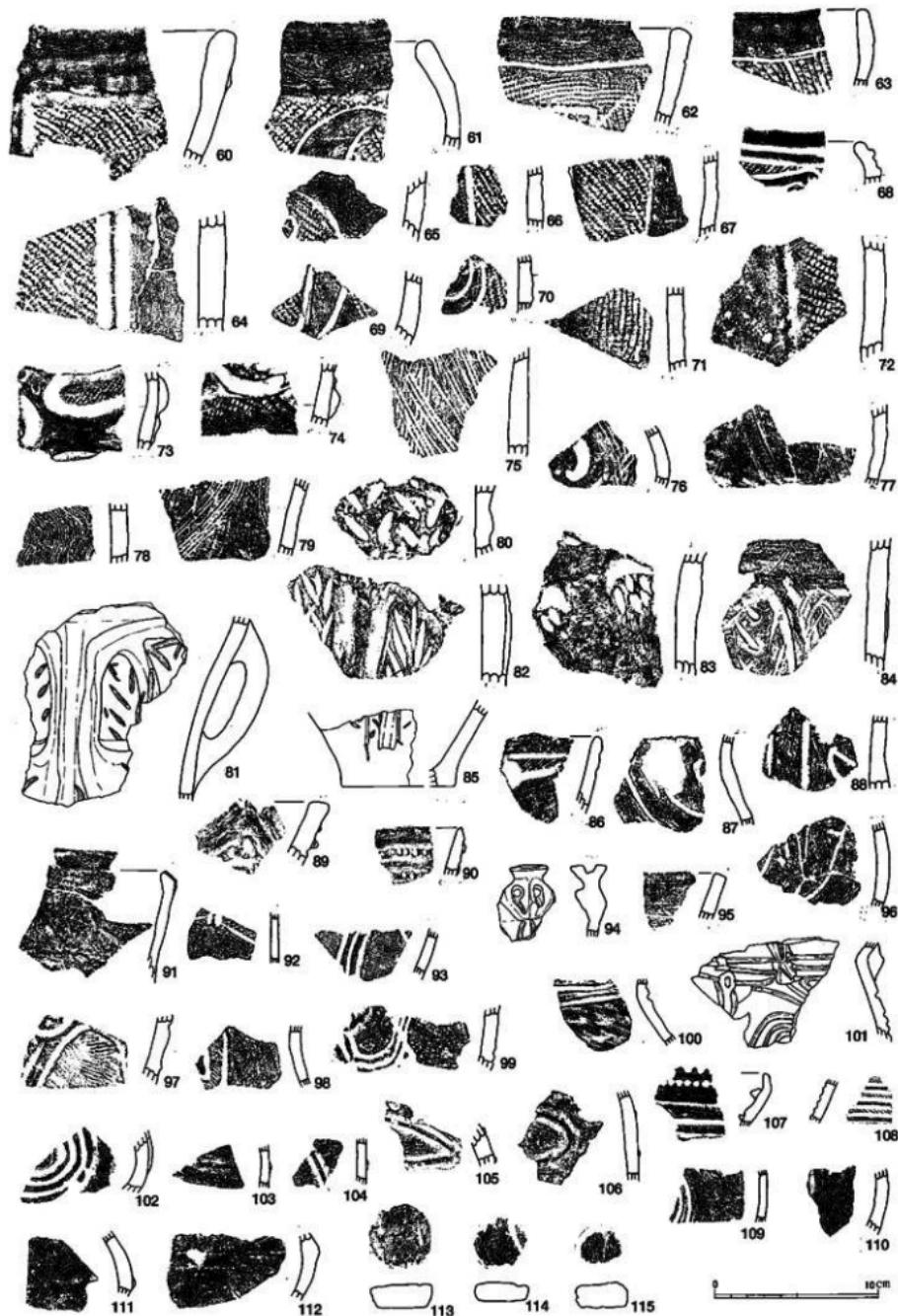
第18図 造構4 (溝状造構)



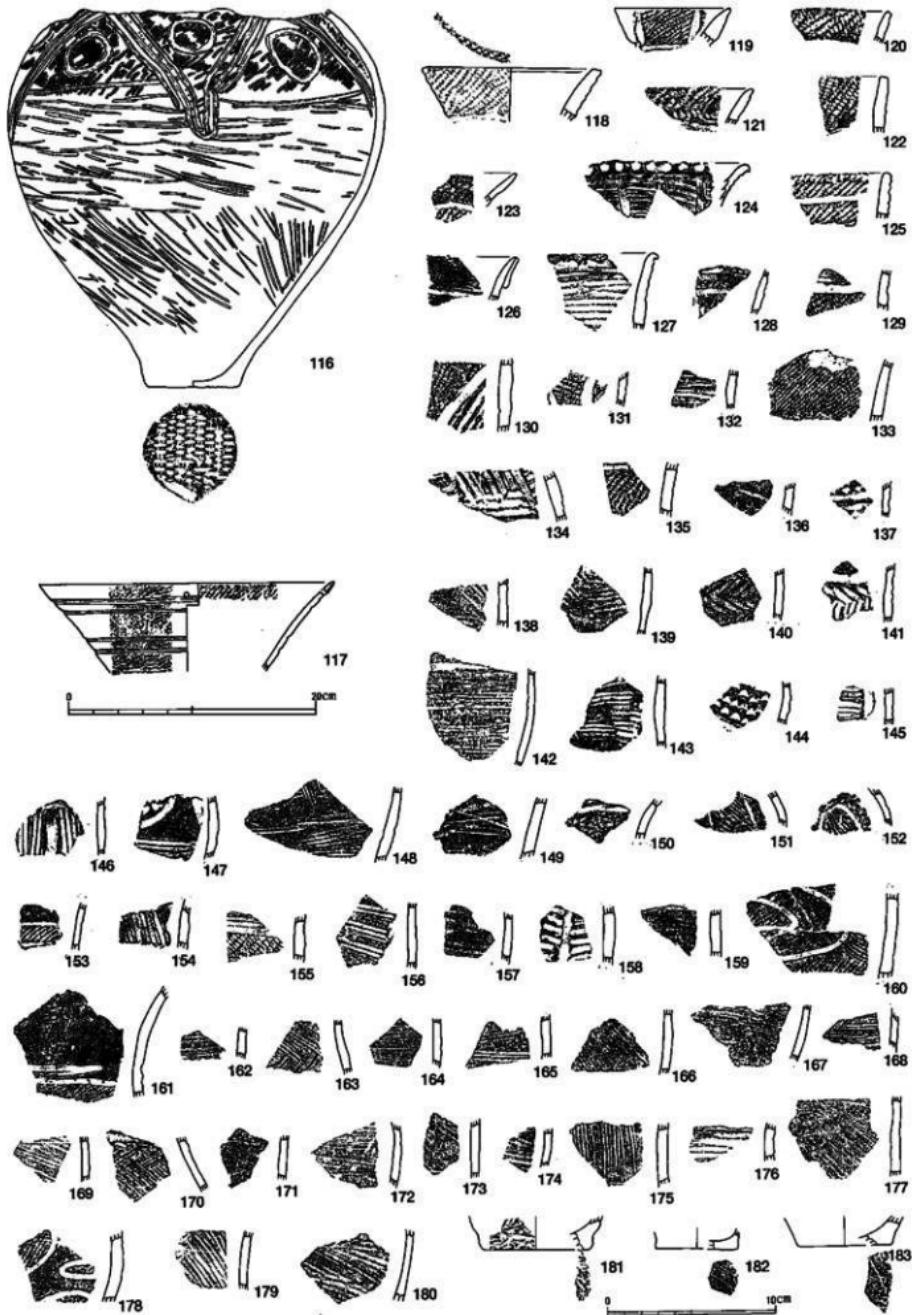
第19図 遺構5（溝状遺構）



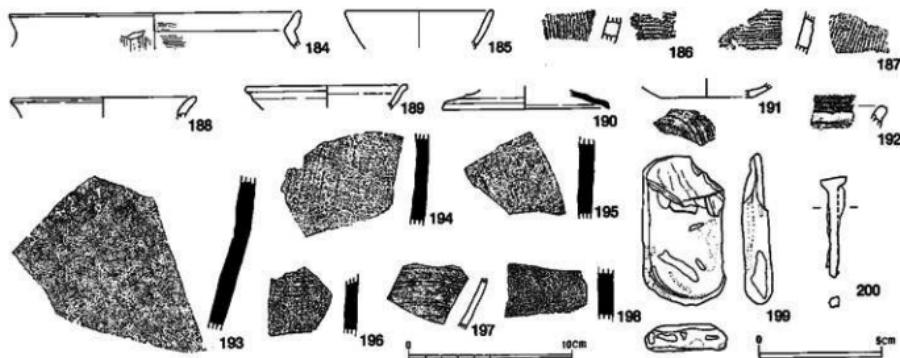
第20図 造物1 (縄文土器)



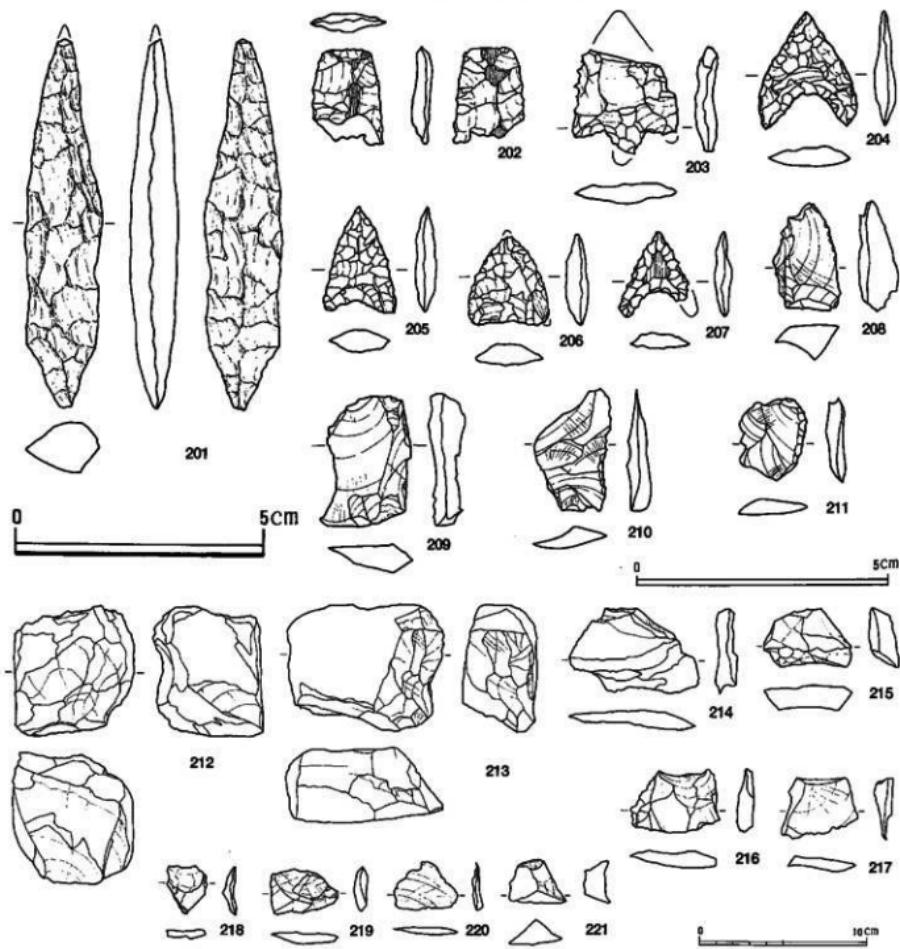
第21図 造物2 (縄文土器・土製円盤)



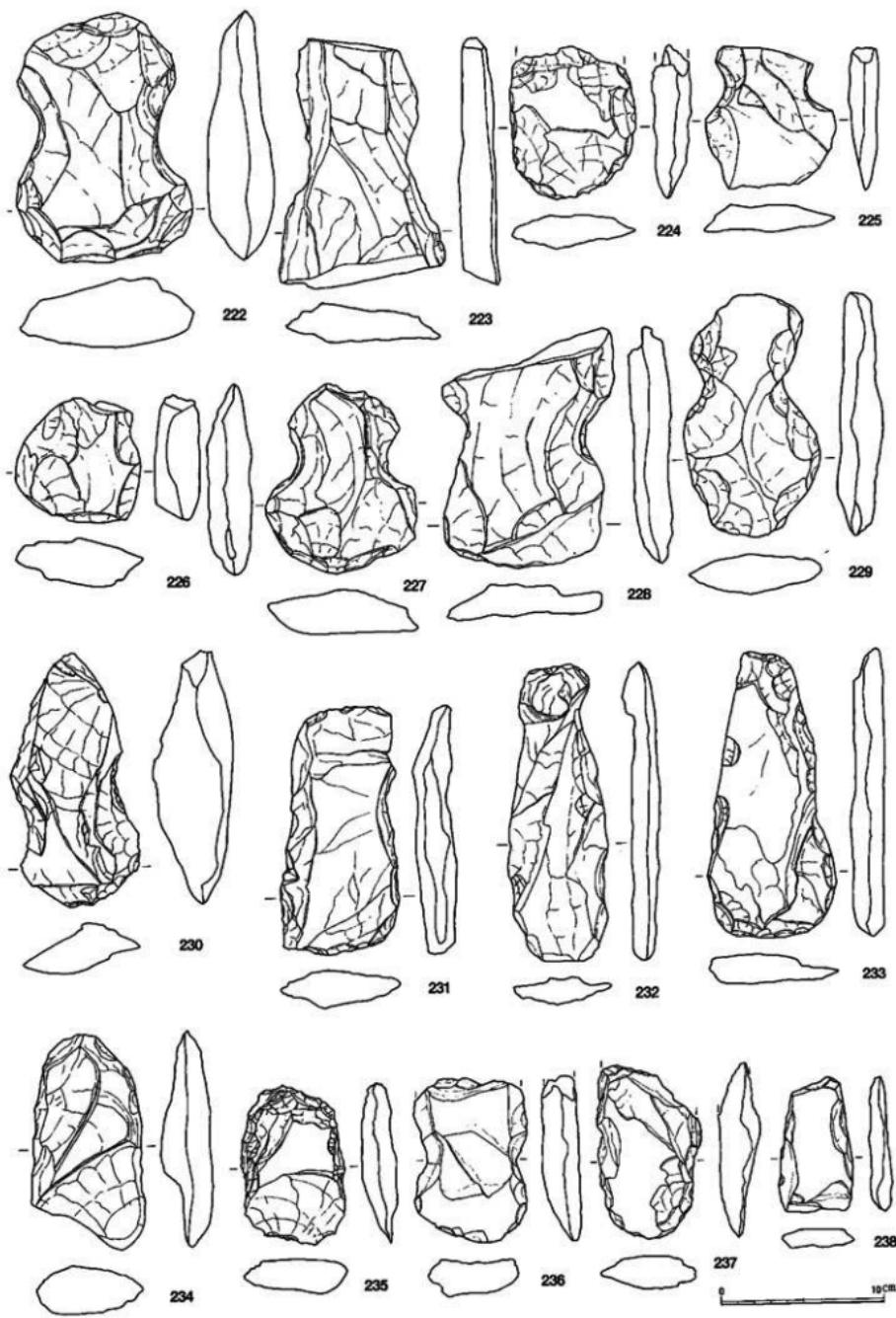
第22図 遺物3（弥生土器）



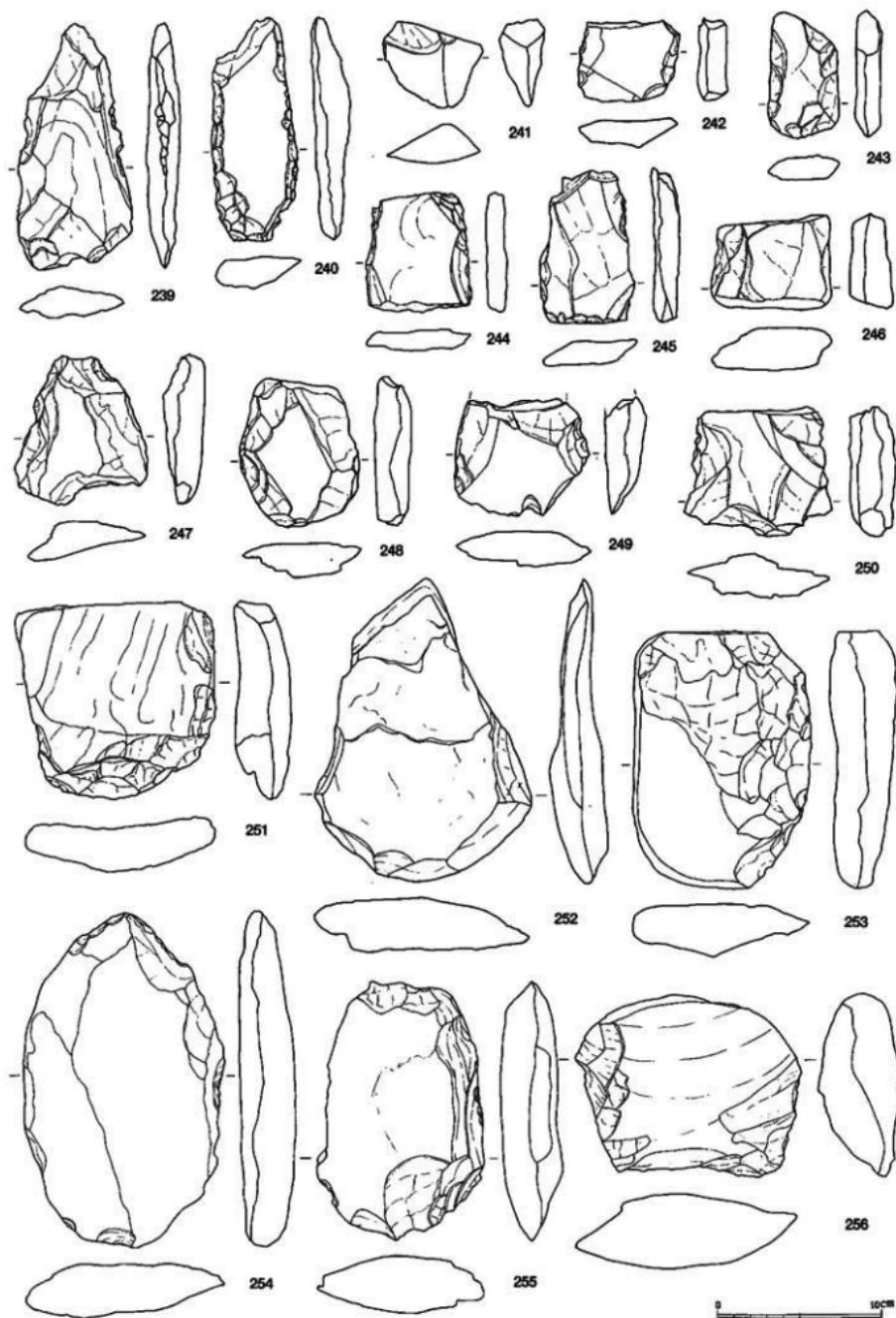
第23図 遺物4(土師器・須恵器、石器・釘)



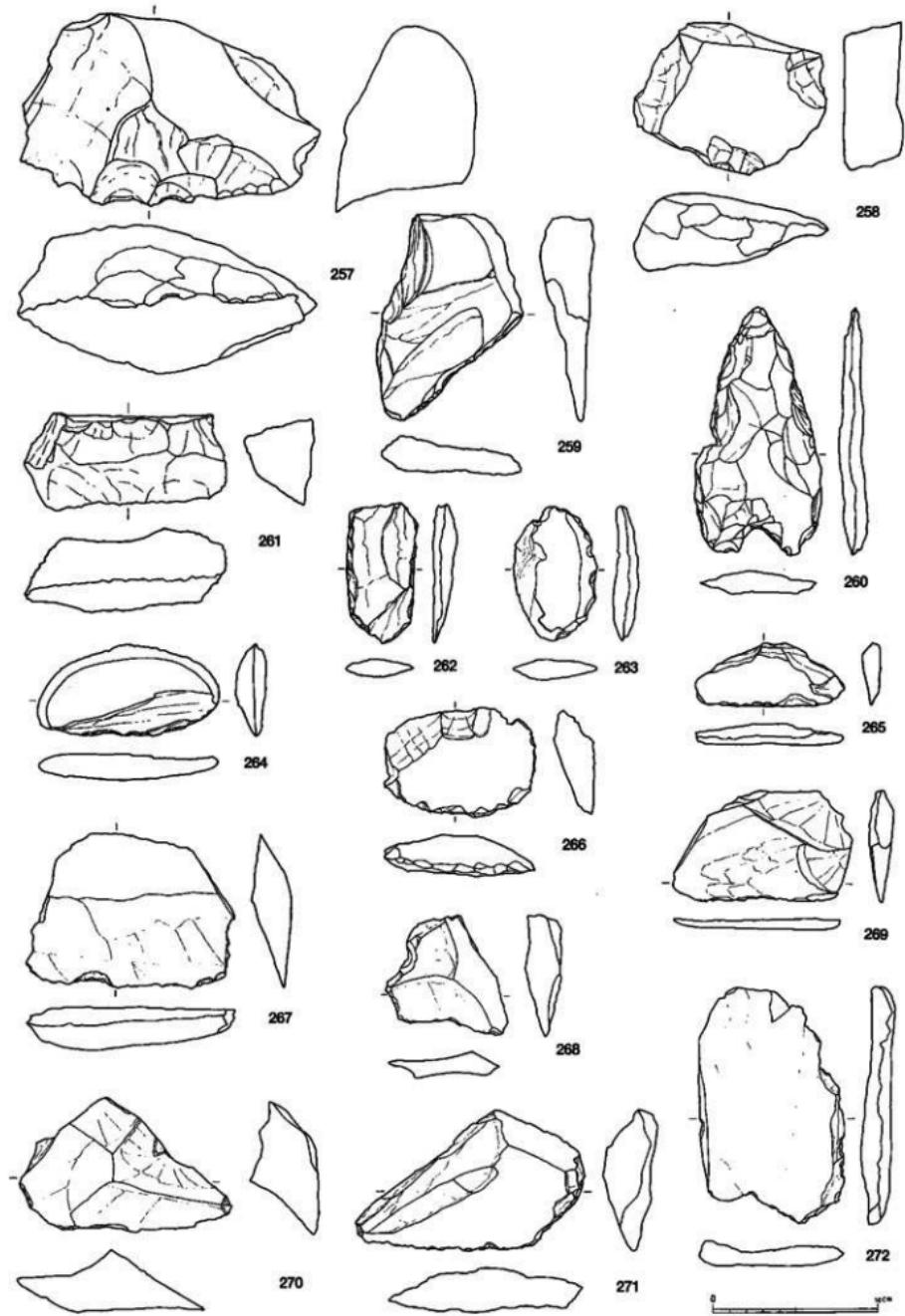
第24図 遺物5(有古尖頭器・石錐・石核・フレイク)



第25図 遺物6 (打製石斧)



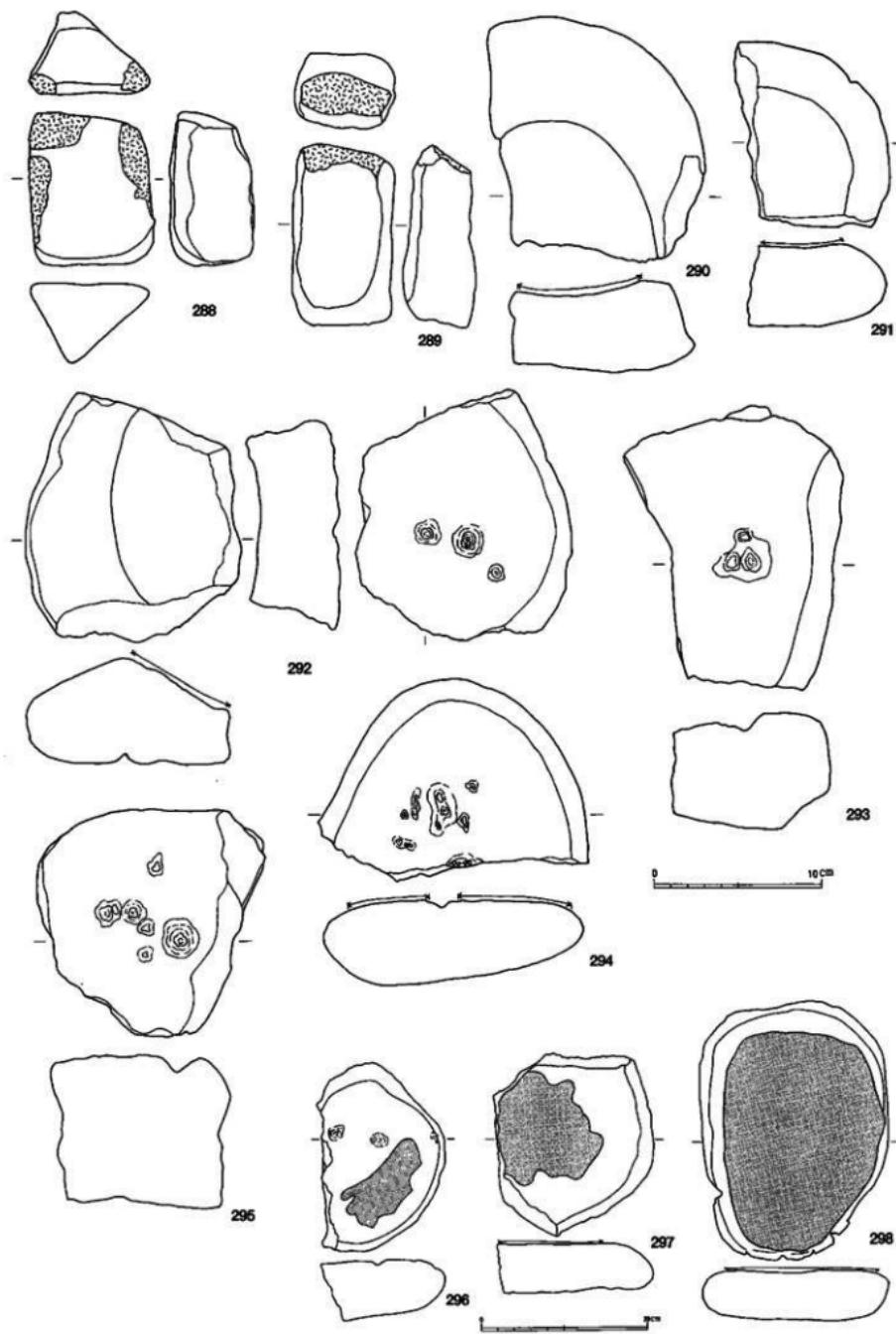
第26圖 遺物7 (打製石斧・礫器)



第27図 造物 8 (砾器・使用痕ある剥片)



第28図 遺物9 (磨石・くぼみ石・敲石)



第29図 遺物10 (敲石・石皿・多孔石・磨面のある台石)

表8 土坑觀察表

番号	位 置	時期	種類	規 模	形 状	遺 物	方 位	備 考
1	C 2		縄文	陥し穴 145×100×130	楕円形	なし	北東—南西	鉢図 図版
2	E31		縄文	土坑 125×115×48	円形	なし	北—南	図版
3	E31		縄文	陥し穴 190×85×75	長楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	図版
4	E30		縄文	土坑 130×90×58	隅丸長方形	なし	北東—南西	図版
5	E29		縄文	陥し穴 165×80×70	楕円形 ピット 1	なし	北東—南西	図版
6	D29		縄文	土坑 145×110×70	楕円形	なし	東—西	図版
7	D32		縄文	風倒木痕	不整形			
8	E29		縄文	陥し穴 100×70×45	楕円形 ピット 1	なし	北東—南西	
9	D29		縄文	風倒木痕	不整形			
10	D29		縄文	土坑 145×100×65	楕円形	なし	北東—南西	
11	C28		縄文	土坑 80×55×25	楕円形	なし	北東—南西	
12	C28		縄文	土坑 85×55×28	楕円形	なし	北東—南西	
13	C26		縄文	土坑 110×85×27	楕円形	なし	北—南	
14	C26		縄文	陥し穴 145×100×110	楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	図版
15	C26		縄文	陥し穴 155×120×80	楕円形 ピット多	なし	東—西	図版
16	C26		縄文	土坑 80×55×35	楕円形	なし	北東—南西	
17	B24~C24~25		縄文	風倒木痕	不整形			
18	C24		縄文	風倒木痕	不整形			
19	C24~25		縄文	陥し穴 150×75×67	楕円形 ピット多	なし	東—西	図版
20	C24~D24		縄文	陥し穴 150×90×37	楕円形 ピット多	なし	北西—南東	図版
21	C24		縄文	陥し穴 160×100×120	楕円形 ピット多	なし	北西—南東	
22	C23		縄文	陥し穴 100×55×83	隅丸長方形 ピット 2	なし	北東—南西	図版
23	B24		縄文	陥し穴 190×70×64	長楕円形 ピット 2	なし	東—西	図版
24	D23		縄文	陥し穴 135×100×90	楕円形 ピット 1	なし	北西—南東	図版
25	D24		縄文	陥し穴 175×95×85	楕円形 ピット多	なし	北東—南西	
26	C22~23		縄文	風倒木痕	不整形			
27	B22		縄文	陥し穴 130×80×55	楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	図版
28	B21		縄文	陥し穴 160×120×115	楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	
29	C19~20~D19~20		縄文	風倒木痕	不整形			
30	C20		縄文	陥し穴 120×70×85	楕円形 ピット 1	なし	北—南	
31	D20		縄文	陥し穴 140×80×85	楕円形 ピット 2	なし	北東—南西	
32	D19		縄文	陥し穴 100×80×100	楕円形 ピット 1	なし	東—南	
33	B19~20		縄文	陥し穴 165×95×90	楕円形 ピット多	なし	北西—南東	鉢図
34	C24~25		縄文	陥し穴 150×75×79	楕円形 ピット 1	なし	北西—南東	図版
35	C19~D20		縄文	陥し穴 165×110×90	楕円形 ピット 4	なし	北西—南東	図版
36	C18~19		縄文	風倒木痕	不整形			
37	B18~19		縄文	風倒木痕	不整形			
38	B21		縄文	陥し穴 150×100×10	楕円形 ピット多	なし	北西—南東	
39	D23~24		縄文	陥し穴 105×80×40	円形	なし	東—西	
40	A17		縄文	土坑 140×135×35	円形	なし	北—南	
41	B15~16~C15~16		縄文	風倒木痕	不整形			
42	C16~17		縄文	土坑 115×100×25	円形	なし	東—西	
43	C15		縄文	陥し穴 130×80×43	楕円形 ピット 2	なし	東—西	図版
44	B15		縄文	陥し穴 150×105×40	楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	
45	A15~B15		縄文	土坑 210×170×50	楕円形	なし	北西—南東	
46	B14~15~C14~15		縄文	陥し穴 200×100×95	楕円形 ピット 2	なし	北東—南西	鉢図 図版
47	C13		縄文	陥し穴 80×50×25	楕円形 ピット 1	なし	東—西	
48	B12		縄文	風倒木痕	不整形			
49	A12~B12		縄文	土坑 125×90×20	楕円形	なし	北東—南西	
50	C11		縄文	土坑 120×100×20	楕円形	なし	北東—南西	
51	C11		縄文	陥し穴 120×120×40	円形 ピット多	なし	北—南	図版
52	C10~11		縄文	陥し穴 180×100×80	長楕円形 ピット多	なし	東—西	図版
53	A11~12~B11		縄文	陥し穴 180×150×65	楕円形 ピット 1	なし	北—南	鉢図
54	A11~12		縄文	陥し穴 175×70×90	長楕円形 ピット 2	なし	北西—南東	図版
55	C10		縄文	陥し穴 100×95×70	円形 ピット 1	なし	北東—南西	図版
56	C 9		縄文	陥し穴 160×70×45	長楕円形 ピット 1	なし	北東—南西	
57	C 8		縄文	陥し穴 180×115×60	隅丸方形 ピット 2	なし	北西—東南	鉢図 図版
58	B12		縄文	土坑 160×120×45	卵形	なし	北北西—南南東	
59	A11~B12		縄文	陥し穴 110×80×55	円形 ピット 2	なし	北東—南西	
60	A12		縄文	風倒木痕	不整形			

番号	位置	時期	種類	規模	形 状	遺物	方 位	備 考
61	C3	縄文	土坑	175×145×60	円形	なし	東一西	
62	C3	縄文	陥し穴	120×80×60	楕円形 ピット2	なし	北東一南北	図版
63	C4	縄文	陥し穴	135×90×85	楕円形 ピット1	なし	北東一南北	
64	B2-C2	縄文	陥し穴	155×80×60	楕円形 ピット2	なし	東一西	図版
65	B10	縄文	土坑	95×75×20	円形	なし	北北西一南南東	
66	A4-5-B4-5	縄文	陥し穴	190×90×55	楕円形 ピット2	なし	北東一南北	
67	B5-6	縄文	陥し穴	105×65×23	楕円形 ピット多	なし	北西一南東	
68	B6-C6	縄文	風倒木痕		不整形			
69	C3	縄文	土坑	100×80×25	円形	なし	東一西	
70	C14	縄文	風倒木痕		不整形			
71	C2	平安	土坑	85×80×8	円形皿状	なし	北一南	
72	B2	平安	土坑	60×55×8	正方形 なべ状	なし	北一南	
73	C2	平安	土坑	70×55×8	楕円形皿状	なし	東一西	
74	B2	平安	土坑	100×55×20	円形 なべ状	なし	北一南	
75	C1	平安	土坑	70×40×20	円形皿状	なし	北一南	
76	C1	平安	土坑	110×100×25	円形皿状	須恵器片	北一南	
77	C1-B1	平安	土坑	155×165×70	円形 なべ状	須恵器片	北一南	
78	C1	平安	土坑	50×50×65	正方形	なし	北一南	
79	C1-C2	平安	土坑	60×60×60	円形	土器1	北一南	
80	C1-C2	平安	土坑	70×35×10	円形皿状	土器4	北一南	
81	C2	平安	土坑	75×65×65	円形	なし	北一南	
82	E30	平安	土坑	135×130×10	円形皿状	なし	北一南	
83	E30	平安	土坑	160×150×15	円形皿状	なし	北一南	
84	D30	平安	土坑	85×80×20	円形 なべ状	土器1	北一南	
85	E28	平安	土坑	110×95×10	円形皿状	なし	北一南	
86	D28	平安	土坑	100×90×20	円形 なべ状	土器1	北一南	
87	D28	平安	土坑	110×120×27	円形 なべ状	なし	北一南	
88	D27	平安	土坑	80×95×13	円形皿状	なし	北一南	
89	D27	平安	土坑	95×90×15	円形皿状	なし	北一南	
90	D27	平安	土坑	85×80×20	円形皿状	なし	北一南	
91	C26-27	平安	土坑	135×100×50	円形 なべ状	土器1	北一南	
92	D26	平安	土坑	110×70×20	円形 なべ状	なし	北東一南北	
93	C26	平安	土坑	90×85×15	円形 なべ状	なし	北一南	
94	C17	平安	土坑	140×55×20	隅丸長方形 なべ状	なし	北東一南北	
95	C17	平安	土坑	145×60×25	隅丸長方形 なべ状	腰6点	北東一南北	
96	不明	平安	土坑	70×75×60	円形	土器1	北一南	
97	C8	平安	土坑	85×70×30	楕円形 なべ状	土器2	北東一南北	
98	C10	平安	土坑	100×65×30	円形 なべ状	土器2	北一南	
99	B10	平安	土坑	120×105×26	円形皿状	土器4	北一南	
100	C11	平安	土坑	170×150×35	円形皿状	土器6	北西一南北	
101	C2-B2	平安	土坑	110×100×20	円形 なべ状	なし	北一南	
102	B13	平安	土坑	100×80×28	円形 なべ状	なし	北東一南北	
103	A15-B15	平安	土坑	115×95×13	楕円形皿状	なし	北東一南北	
104	C15	平安	土坑	95×70×20	円形 なべ状	なし	北一南	
105	C15	平安	土坑	110×105×35	円形 なべ状	なし	北一南	
106	C17-18	平安	土坑	100×90×	楕円形	なし	北一南	
107	B18	平安	土坑	90×70×14	円形皿状	なし	東一西	
108	B18	平安	土坑	105×100×30	円形 なべ状	土器1	北一南	
109	B18	平安	土坑	100×100×6	円形皿状	なし	北一南	
110	B20	平安	土坑	130×120×25	円形 なべ状	なし	北一南	
111	B21	平安	土坑	130×115×28	楕円形皿状	なし	東一西	
112	B22	平安	土坑	95×92×30	円形 なべ状	なし	北一南	
113	B22	平安	土坑	90×65×8	楕円形皿状	なし	北東一南北	
114	B22-23	平安	土坑	65×60×15	円形皿状	なし	北一南	
115	C22	平安	土坑	105×90×15	円形 なべ状	なし	北一南	
116	C24	平安	土坑	120×120×30	円形 なべ状	なし	北一南	
117	C21	平安	土坑	110×100×20	円形 なべ状	なし	北一南	
118	C21	平安	土坑	90×70×13	円形皿状	なし	北一南	
119	B17-18	平安	土坑	120×55×20	円形皿状	なし	北東一南北	
120	D21	平安	土坑	130×105×15	楕円形皿状	なし	北一南	
121	B16-C18	平安	土坑	130×120×40	楕円形 なべ状	なし	北一南	

番号	位置	時期	種類	規 模	形 状	遺物	方 位	備 考
122	A16-B16	平安	土坑	115×110×35	円形 なべ状	なし	北-南	
123	A16	平安	土坑	95×80×10	円形 盆状	なし	北-南	
124	B16-C15-16	平安	土坑	120×115×40	円形 なべ状	なし	北-南	

溝

番号	位置	時期	種類	規 模 (長径・短径・深さ)	遺物	方 位	備 考
1	B4、C4	平安以降	溝	265×60×10	なし	北東-南西	
2	B3	平安以降	溝	210×50×10	なし	北東-南西	
3	B3	平安以降	溝	175×50-70×15	S-3	北東-南西	一括土器出土
4	B4、C4	平安以降	溝	270×45-55×16	古銭1	北-南	古銭
5	A5、B5、B4	平安以降	溝	230×55×32	古銭1	北東-南西	
6	B4	平安以降	溝	190×60×15	古銭1	北-南	
7	C1	平安以降	溝	60×50×50	古銭1	北-南	
8	C2、D2	平安以降	溝	180×60×65	S1(黒曜石)	北-南	
9	B6、C6	平安以降	溝	230×50×30-43	P-12	北-南	
10	B7	平安以降	溝	80×45×7-10	なし	北東-南西	
11	D30-31、E30-31	平安以降	溝	665×65×20	なし	北北東-南南西	
12	D30、E30	平安以降	溝	535×55-75×15-25	なし	北東-南西	
13	D30、E30	平安以降	溝	130×60×8	なし	北東-南西	
14	D30	平安以降	溝	150×55-70×12	なし	北-南	
15	D28、D29	平安以降	溝	170×55-65×10-15	P-2	北東-南西	
16	D27	平安以降	溝	165×70-80×25	なし	北東-南西	
17	C26	平安以降	溝	150×55×5	なし	北東-南西	
18	C26	平安以降	溝	270×65×42	なし	北東-南西	
19	C7	平安以降	溝	170×60-65×30	P-3	北東-南西	
20	C7、C8	平安以降	溝	250×50-60×10	P-7	北北東-南南西	
21	B8、C8	平安以降	溝	230×50×25	P-6	北北東-南南西	
22	C8	平安以降	溝	150×50-60×20	S-1、P-7	北東-南西	
23	C8	平安以降	溝	80×50×14	P-6	北東-南西	
24	C8	平安以降	溝	200×35-50×14	P-4	北東-南西	
25	B8	平安以降	溝	50×30×10	P-4	西-東	
26	B8	平安以降	溝	80×40×40	P-11	北北東-南南西	
27	B8	平安以降	溝	60×50×23	釘	北北東-南南西	(角釘)
28	C8	平安以降	溝	240×30-40×30	P-5	北北東-南南西	
29	C7	平安以降	溝	155×50×35	P-2	北北東-南南西	
30	C7	平安以降	溝	45×80×10	P-2	北-南	
31	B8、C8	平安以降	溝	85×40×25	P-3	北北東-南南西	
32	B10	平安以降	溝	525×80-100×20-25	P-4	北北東-南南西	
33	C26	平安以降	溝	65×40×37	なし	北北東-南南西	
34	C13、C14	平安以降	溝	155×70×2-10	なし	北北東-南南西	
35	B15、C15	平安以降	溝	410×70-80×10-15	P-3	北東-南西	
36	B14、B15、C14	平安以降	溝	550×80-95×35-45	P-7	北東-南西	
37	A18、B18	平安以降	溝	145×70×32	P-1	北北東-南南西	
38	C18	平安以降	溝	145×75×20-30	なし	北東-南西	
39	B19、C19	平安以降	溝	230×75-85×40-45	なし	北北東-南南西	
40	B20	平安以降	溝	150×65×10	なし	北北東-南南西	
41	C20	平安以降	溝	120-150×60×8-12	なし	北北東-南南西	
42	B23	平安以降	溝	140×55×8-14	なし	北北東-南南西	
43	B23、C23	平安以降	溝	250×80×10	なし	北北東-南南西	
44	C10	平安以降	溝	185×65×13	P-4	北北東-南南西	
45	B10、A10	平安以降	溝	100×135×10-15		北北東-南南西	
46	B11	平安以降	溝	455×70-75×47.8	S-1、P-3	北北東-南南西	
47	C21	平安以降	溝	150×35×22	なし	北北東-南南西	
48	C17、C18	平安以降	溝	250×60-70×40	なし	北北東-南南西	
49	B18、B19	平安以降	溝	390×55-60×10-12	なし	北北東-南南西	
50	C18、B18-19	平安以降	溝	330×60×15-20	なし	北北東-南南西	
51	B19	平安以降	溝	230×45×12-20	なし	北北東-南南西	
52	B21	平安以降	溝	280×65-75×25-30	P-1	北東-南西	
53	B14、A14、B15	平安以降	溝	360×50×50	P-3	北東-南西	
54	C22、C23	平安以降	溝	630×75-90×30-40	なし	北北東-南南西	
55	D22、D23	平安以降	溝	200×50-60×10-15	なし	北北東-南南西	
56	A17、B17	平安以降	溝	280×80×40-50	なし	北北東-南南西	
57	A17、B17	平安以降	溝	240×90×20-25	なし	北北東-南南西	

表9 南大浜石器観察表

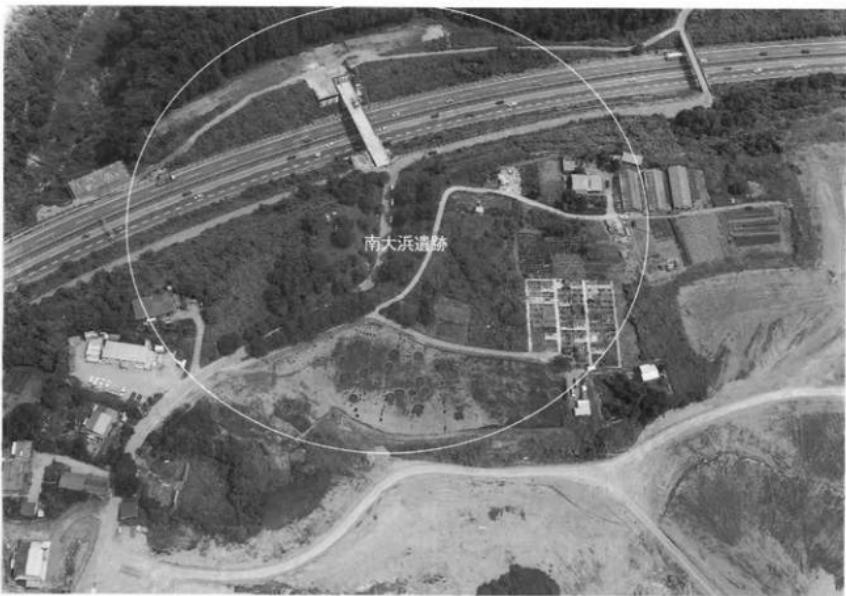
標団番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	備考
23	40土 S1	199	平安	ベンガラの付いた石器	6.0	5.0	1.8	10.9	砂岩	1/4	97南大浜 40土 S1 96.6.26 実-66
24-1	C21 S333	201	縄文	有舌尖頭器	7.35	1.60	1.05	11.5	砂岩	一部	97南大浜 C21 333 実-69
24-2	D23 S182	202	縄文	トロロ石器?	1.85	1.40	0.30	0.9	頁岩	一部	97南大浜 D23 182 実-70
~	C24 S234	203	縄文	石鎌	2.00	2.10	0.40	1.5	黒曜石	一部	97南大浜 C24 234 実-94
~	C13 S166	204	縄文	石鎌	2.25	1.90	4.00	0.9	黒曜石	完	97南大浜 C13 166 実-97
~	C23 S338	205	縄文	石鎌	2.10	1.50	0.45	0.9	黒曜石	完	97南大浜 C23 338 実-95
~	D26 S212	206	縄文	石鎌	(1.80)	1.60	0.45	1.0	黒曜石	一部	97南大浜 D26 212 実-96
~	C1 S130	207	縄文	石鎌	1.50	1.20	3.00	0.3	黒曜石	一部	97南大浜 C1 130 実-98
~	C8 S191	208	縄文	加工痕ある剥片	2.15	1.30	0.80	1.5	黒曜石	——	実-100
~	B15 S29	209	縄文	加工痕ある剥片	2.60	1.85	0.70	2.5	黒曜石	——	実-99
~	A12 S24	210	縄文	加工痕ある剥片	2.45	1.50	0.50	1.1	黒曜石	——	実-101
~	C6 S190	211	縄文	加工痕ある剥片	1.65	1.35	0.35	0.6	黒曜石	——	実-102
24-3	D29 S96	212	縄文	石核	7.75	7.2	6.6	503	チャート	——	97南大浜 D29 96 実-71
~	D29 S95	213	縄文	石核	7.5	9.5	4.5	437	チャート	——	97南大浜 D29 95 実-20
~	表採	214	縄文	フレイク	5.0	7.75	1.3	35	チャート	——	97南大浜 表採 実-75
~	C17 S138	215	縄文	フレイク	3.5	5.2	1.8	29	珪質頁岩	——	97南大浜 C17. 138 実-88
~	C9 S272	216	縄文	フレイク	3.85	5.2	1.0	21	珪質頁岩	——	97南大浜 272. C9 実-76
~	D30 S89	217	縄文	フレイク	3.7	4.6	1.1	13	砂岩	——	97南大浜 D30. 89 実-74
~	C7 S194	218	縄文	フレイク	2.9	2.4	0.8	4	めのう	——	97南大浜 194. C7 実-79
~	D32 S220	219	縄文	フレイク	2.7	4.0	0.8	8	チャート	——	97南大浜 D32. 220 実-89
~	C15 S28	220	縄文	フレイク	2.9	3.9	0.7	4	チャート	——	97南大浜 28. C15 実-77
~	D30 表採	221	縄文	フレイク	2.6	3.5	1.5	9	珪質頁岩	——	南大浜 D30 表採 実-87
25	C24 S163	222	縄文	分鋸型打製石斧(完形)	15.20	10.80	4.10	704	フォルヌス	完	97南大浜 163 C24 実-22
~	C14 S71	223	縄文	分鋸型打製石斧	15.20	10.20	2.20	374	粘板岩	1/4	97南大浜 C14 71 実-26
~	D32 S213	224	縄文	短縛型打製石斧(完形-?)	9.40	7.75	2.40	182	フォルヌス	1/2	97南大浜 D32 213 実-4
~	B18 S254	225	縄文	分鋸型打製石斧	8.70	7.90	1.90	126	泥岩	1/2	97南大浜 B18 254 実-24
~	D26 S206	226	縄文	分鋸型打製石斧	7.50	7.90	2.80	199	フォルヌス	3/4	97南大浜 D26 206 実-82
~	S5 C17	227	縄文	分鋸型打製石斧(完形-?)	11.50	9.40	2.70	297	粘板岩	一部	97南大浜 25土坑 5 実-21
~	B4 S128	228	縄文	分鋸型打製石斧	14.45	10.60	2.50	417	フォルヌス	1/4	97南大浜 B4 128 実-19
~	第1トレンチ 2層	229	縄文	分鋸型打製石斧	14.70	8.25	2.85	340.2	——	一部	実-22-1
~	C13 S349	230	縄文	短縛or「チ」打製石斧	15.40	7.90	4.90	473	泥岩	一部	97南大浜 C13 349 実-83
~	C8 S310	231	縄文	短縛or「チ」打製石斧	15.10	7.30	2.30	321	粘板岩	一部	97南大浜 C8 310 実-84 (3月撮合)
~	E29 S156	232	縄文	短縛or「チ」打製石斧	18.20	6.0	2.20	224	フォルヌス	一部	97南大浜 E29 156 実-86
~	C11 S49	233	縄文	短縛or「チ」打製石斧	17.50	7.85	2.30	343	フォルヌス	一部	97南大浜 C11 49 実-73
~	E31 S85	234	縄文	短縛or「チ」打製石斧	13.30	7.00	3.20	283	フォルヌス	1/3	97南大浜 E31 85 実-85
~	C5 S12	235	縄文	短縛or「チ」打製石斧	9.80	6.35	2.15	146	粘板岩	一部	97南大浜 C5 12 実-72
~	B12 S288	236	縄文	打製石斧(分鋸型)	10.10	7.00	2.30	199	フォルヌス	1/4	97南大浜 B12 288 実-5
~	33 S7	237	縄文	打製石斧片	10.60	6.40	2.50	148	粘板岩	一部	97南大浜 B3 7 実-6
~	B7 S274	238	縄文	打製石斧片	8.30	4.60	1.40	61	粘板岩	一部	97南大浜 B7 274 実-7
26	B2 S2	239	縄文	打製石斧片(彫形)	15.00	7.10	2.10	193	粘板岩	一部	97南大浜 B2 2 実-14
~	A13 S134	240	縄文	打製石斧片(彫形)	13.60	5.20	2.20	162	粘板岩	一部	97南大浜 A13 134 実-13
~	4上 E30 グリット S2	241	縄文	打製石斧片	5.30	6.10	2.80	66	泥岩	——	97南大浜 4土坑 2 実-34
~	C8 S112	242	縄文	打製石斧片	4.90	6.20	1.85	68	泥岩	——	97南大浜 C8 112 実-30
~	4溝一括	243	縄文	打製石斧片	7.60	4.30	1.50	73	粘板岩	——	97南大浜 4溝 実-32
~	B14 S133	244	縄文	打製石斧片	7.30	6.50	1.20	84	粘板岩	——	97南大浜 B14 133 実-28
~	A16 S184	245	縄文	打製石斧片	9.30	5.80	1.70	114	粘板岩	——	97南大浜 A16 184 実-29
~	4溝一括	246	縄文	打製石斧片	5.80	7.40	2.60	156	フォルヌス	——	97南大浜 4溝 実-31
~	D28 S345	247	縄文	打製石斧片	9.10	8.15	2.60	145	粘板岩	——	97南大浜 D28 345 実-8
~	D19 S76	248	縄文	打製石斧片	9.00	7.30	2.30	167	フォルヌス	——	97南大浜 D19 76 実-10
~	D27 S212	249	縄文	打製石斧片	7.00	8.25	2.55	162	フォルヌス	——	97南大浜 D27 202 実-9

標図番号	出土地点	番号	時期	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	欠損状況	備考
26	D18 S75	250	縄文	打製石斧片	7.70	9.00	2.80	200	泥岩	—	97南大浜 D18 75 実-27
~	C19 S331	251	縄文	打製石斧片	11.90	11.60	3.40	577	フォルン フェルス	—	97南大浜 C19 331 実-37 (3片)
~	B13 ㉙ トレンチ	252	縄文	打製石斧	16.30	13.40	3.60	758	フォルン フェルス	一部	97南大浜 第2トレンチ B13 実-36
~	C13 B55	253	縄文	打製石斧	15.60	10.80	4.05	838	粘板岩	一部	97南大浜 C13 55 実-11
~	C20 S332	254	縄文	打製石斧	20.50	12.20	3.35	893	粘板岩	一部	97南大浜 C20 332 実-12
~	B11 S52	255	縄文	打製石斧	15.70	10.50	3.80	678	フォルン フェルス	一部	97南大浜 B11 52 実-33
~	C20 S244	256	縄文	打製石斧	11.20	13.80	4.90	870	フォルン フェルス	一部	97南大浜 C20 244 実-35
27	B 1 S129	257	縄文	礫器	10.60	18.30	8.90	1,767	砂岩	完	97南大浜 B 1 129 実-90
~	B10 S18	258	縄文	礫器	9.85	11.90	4.80	464	砂岩	完	97南大浜 B10 18 実-93
~	C18 S354	259	縄文	横刀型石器(?)	12.5	9.0	3.2	294	粘板岩	完	97南大浜 C18 354 実-23
~	B10 S47	260	縄文	使用痕のある 剥片	15.3	7.8	1.75	177	粘板岩	—	97南大浜 47 B10 実-1
~	D27 S344	261	縄文	礫器	5.85	12.4	5.1	394	フォルン フェルス	完	97南大浜 344 D27 実-92
~	B 5 S271	262	縄文	横刀型石器(?)	8.5	4.3	1.4	53	粘板岩	一部	97南大浜 B 5 271 実-15
~	D層	263	縄文	使用痕のある 剥片	8.2	5.2	1.6	65	粘板岩	—	97南大浜 石器 D層
~	D29 S361	264	縄文	使用痕のある 剥片	11.1	5.6	1.8	131	粘板岩	—	97南大浜 361 D29 実-81
~	C 5 S99	265	縄文	使用痕のある 剥片	3.85	9.05	1.25	40	粘板岩	—	97南大浜 C 5 199 実-18
~	B21 S237	266	縄文	使用痕のある 剥片	6.8	9.3	2.6	155	粘板岩	—	97南大浜 B21 237 実-2
~	C12 S284	267	縄文	使用痕のある 剥片	9.4	12.8	2.65	332	粘板岩	—	97南大浜 C12 284 実-17
~	D19 S77	268	縄文	使用痕のある 剥片	7.4	7.6	2.3	92	泥岩	—	97南大浜 D19 77 実-38
~	D21 S176	269	縄文	使用痕のある 剥片	6.8	10.9	1.5	118	粘板岩	—	97南大浜 D21 176 実-25
~	C13 S122 D 3	270	縄文	使用痕のある 剥片	14.4	8.85	2.1	235	粘板岩	—	C13 122・123接合 実-16
~	C19 S167	271	縄文	使用痕のある 剥片	8.2	13.0	4.3	244	泥岩	—	97南大浜 C19 167 実-39
~	B14 S324	272	縄文	使用痕のある 剥片	8.6	14.15	3.3	289	粘板岩	—	97南大浜 B14 324 実-40
28	C24 S339	273	縄文	磨石	(10.70)	8.60	4.90	583	花崗岩	1/3	97南大浜 C24 339 実-43
~	C28 S223	274	縄文	磨石	8.20	9.60	4.15	451	玄武岩	完	97南大浜 C28 223 実-63
~	E30 S152	275	縄文	磨石(台?)	6.00	7.80	7.40	522	玄武岩	一部	97南大浜 E30 152 実-48
~	C 7 S307	276	縄文	磨石(台?)	9.20	10.10	10.85	1,211	玄武岩	一部	97南大浜 C 7 307 実-47
~	C10 S43	277	縄文	磨石	15.20	8.00	5.20	1,085	砂岩	完	97南大浜 C10 43 実-62
~	D28 S342	278	縄文	磨石(台?)	11.20	17.90	7.40	1,969	花崗岩	1/2	97南大浜 D28 342 実-49
~	E28 S343	279	縄文	磨石	4.60	6.00	4.30	108	砂岩	一部	97南大浜 E28 343 実-64
~	C 2 S114	280	縄文	磨石	(8.30)	(8.60)	3.90	274	砂岩	1/2	97南大浜 C 2 114 実-45
~	C 6 S189	281	縄文	磨石+凹石	7.60	8.90	4.15	380	玄武岩	1/2	97南大浜 C 6 189 実-44
~	E28 S99	282	縄文	磨石	5.50	5.00	3.60	160	玄武岩	1/3	97南大浜 E28 99 実-65
~	C 2 S 1	283	縄文	磨石+凹石	8.80	5.40	3.75	211	砂岩	一部	97南大浜 C 2 1 実-42
~	B 7 S308	284	縄文	磨石+凹石	10.20	7.90	4.60	472	玄武岩	完	97南大浜 B 7 308 実-41
~	B 4 S13	285	縄文	磨石	8.25	6.30	4.20	270	砂岩	一部	97南大浜 B 4 13 実-46
~	D24 S180	286	縄文	磨石	9.30	6.00	3.10	251	砂岩	完	97南大浜 D24 180 実-58
~	E30 S347	287	縄文	磨石	3.60	8.40	5.20	184	砂岩	1/3	97南大浜 E30 347 実-60
29	C20 S241	288	縄文	磨石	8.30	7.70	5.00	451	砂岩	完	97南大浜 C20 241 実-61
~	C12 S365	289	縄文	磨石	10.90	6.00	3.60	465	粘板岩	完	97南大浜 C12 365 実-59
~	B18 S62	290	縄文	石皿	14.70	13.20	6.00	1,637	玄武岩	1/4	97南大浜 B18 62 実-52
~	C 8 S312	291	縄文	石皿	11.00	9.40	6.55	772	玄武岩	1/4	97南大浜 C 8 312 実-51
~	不明	292	縄文	石皿+多孔石	15.00	13.10	7.80	1,721	玄武岩	1/4	不明 実-50
~	C14 S57	293	縄文	多孔石(?)	17.00	13.10	7.70	2,143	玄武岩	1/4	97南大浜 C14 57 実-53 四は1ヶ所だけ
~	C12 S19	294	縄文	石皿+多孔石(?)	12.00	16.00	5.20	1,498	玄武岩	1/2	97南大浜 C12 19 実-54
~	C20 S243	295	縄文	磨面+多孔石	13.65	13.80	9.40	2,981	玄武岩	1/3	97南大浜 C20 243 実-56
~	C24 S232	296	縄文	磨面+多孔石	22.70	14.90	6.30	3,590	砂岩	1/2	97南大浜 C24 232 実-55
~	B15 S73	297	縄文	磨面のある台石	22.00	19.40	6.00	3,765	磨岩	1/4	97南大浜 B15 73 実-57
~	C11 S364	298	縄文	磨面のある 苔石? (石皿)	31.00	22.70	6.90	7,340	花崗岩	完	97南大浜 C11 377 実-67

図版



南大浜遺跡 全景（東南カラ）



南大浜遺跡 全景



第1面 調査風景



遺跡の周辺



2・3号溝



第1面 遺構検出状況（西カラ）



5号溝



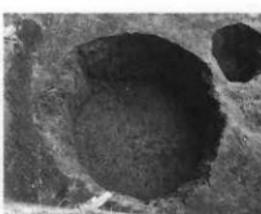
4号溝



11~14号溝・82~84号土坑



第1面 遺構検出状況（東カラ）



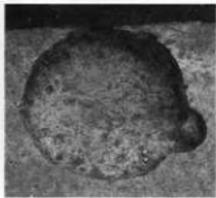
77号土坑



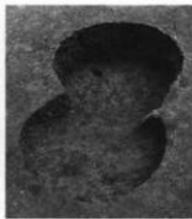
79・80号土坑



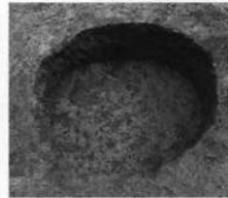
95号土坑



100号土坑



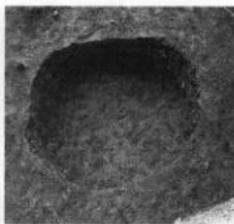
104・105号土坑



108号土坑



112号土坑



122号土坑



121号土坑



弥生土器出土状況



弥生土器調査風景



弥生土器検出状況



弥生土器周辺の焼土範囲



遺物出土状況



1号集石出土状況



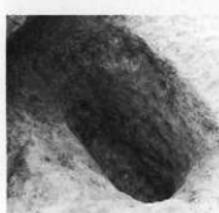
第3面 調査風景



第3面 遺構検出状況 (西カラ)



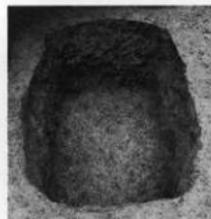
第3面 造構検出状況 (西カラ)



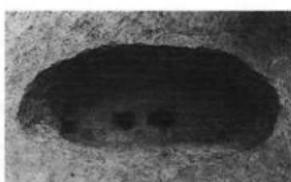
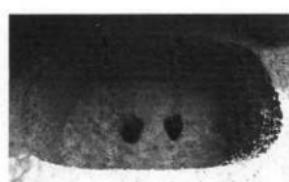
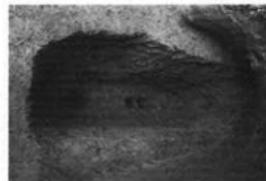
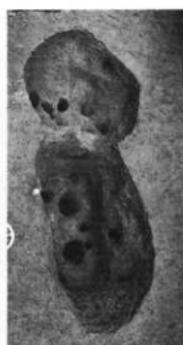
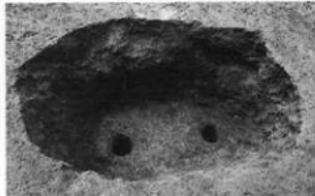
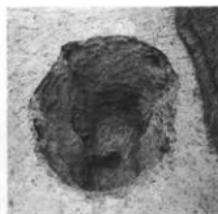
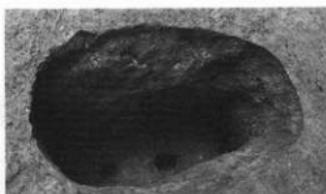
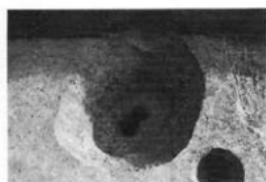
1号土坑

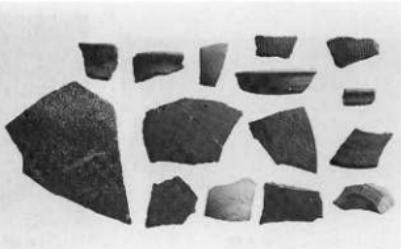
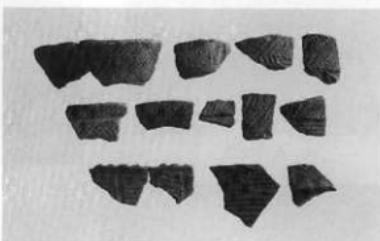


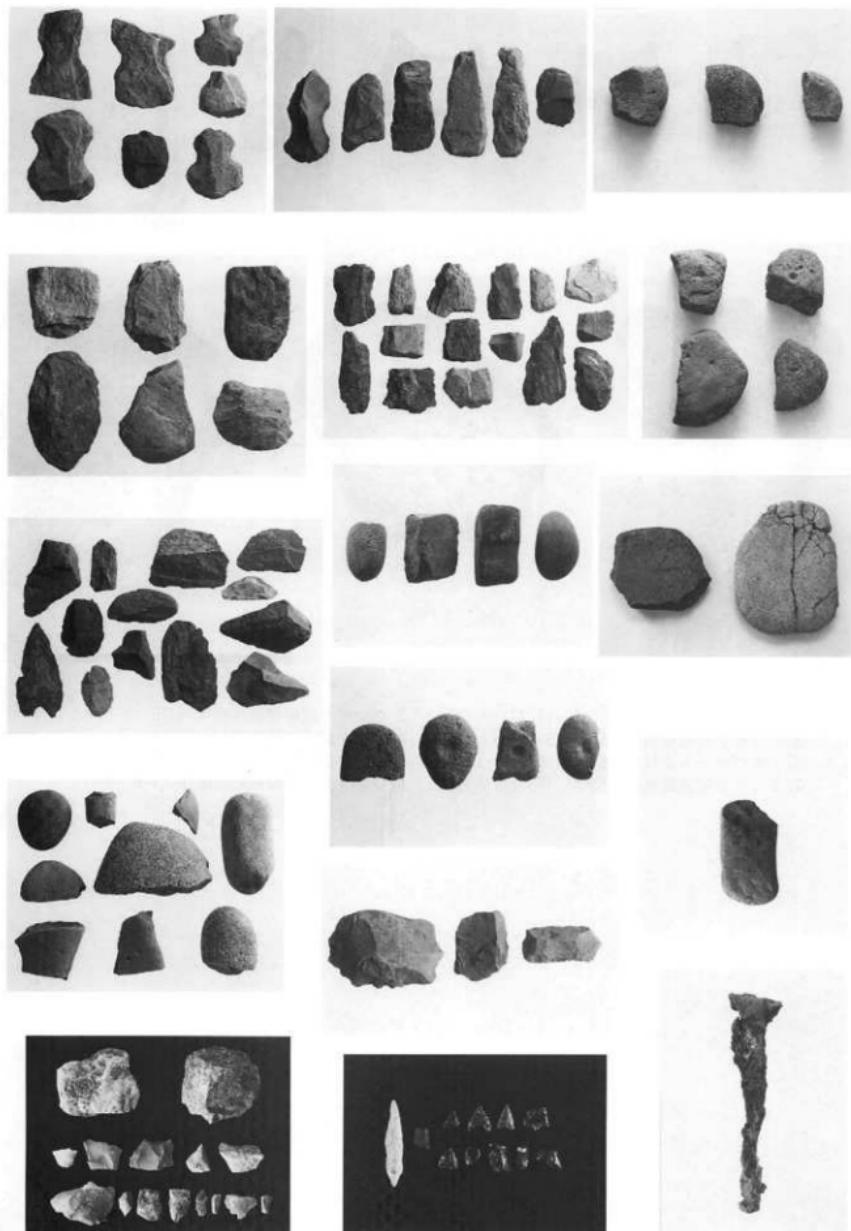
2・3号土坑



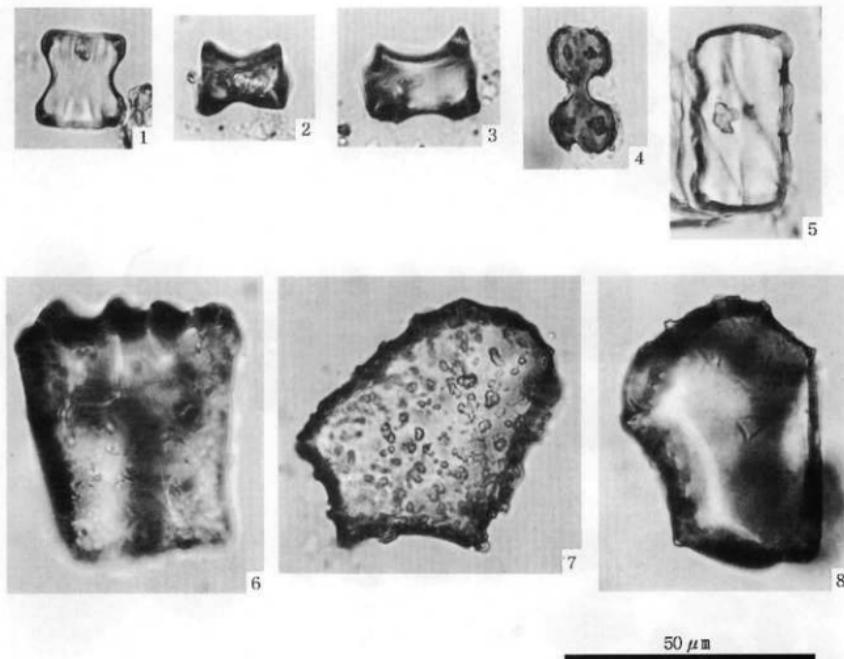
4号土坑



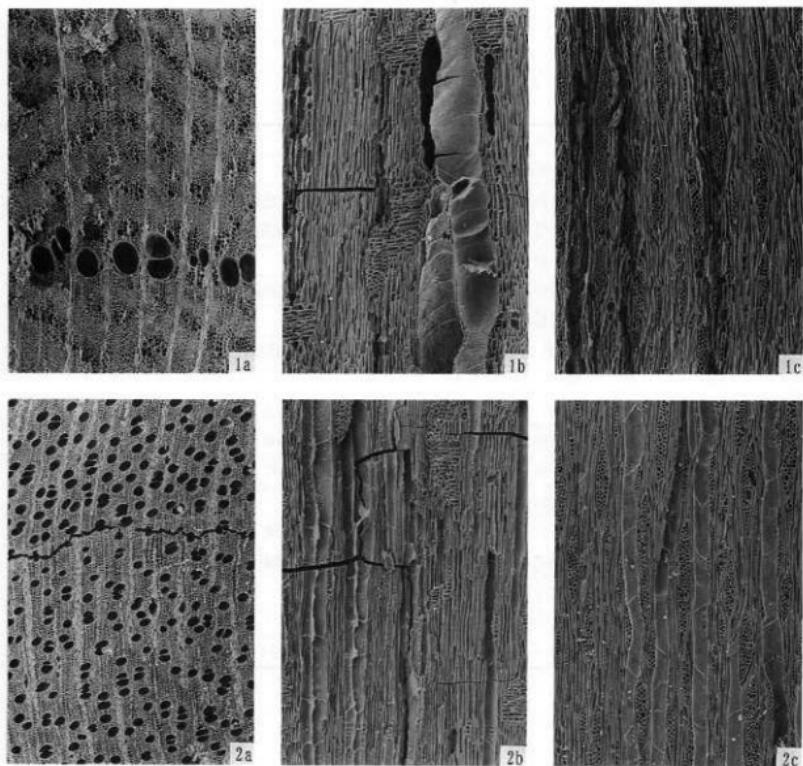




図版1 植物珪酸体



1. ネザサ節短細胞珪酸体 (175-14-7)
2. クマザサ属短細胞珪酸体 (175-14-15上)
3. クマザサ属短細胞珪酸体 (175-14-15上)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (175-14-7)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (175-14-7)
6. ネザサ節機動細胞珪酸体 (175-14-7)
7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (175-14-15上)
8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (175-14-7)



1. ケヤキ (45号土坑)

2. カエデ属 (45号土坑)

a : 木口, b : 楢目, c : 板目

— 200 μm : a,
— 200 μm : b, c

報告書概要

フリガナ	ミナミオオハマイセキ
書名	南大浜遺跡
副題	中央自動車道富士吉田線改築工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告第166集
編著者名	笠原みゆき
発行者	山梨県教育委員会・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL055-266-3016
印刷所	株式会社ヨネヤ
印刷日・発行日	2000(平成12)年3月25日・2000(平成12)年3月31日
遺跡所在地	山梨県北都留郡上野原町鶴川字日野道1060
1/25000地図名・位置	上野原 北緯 35° 37' 49" 東経 139° 05' 46" 標高 294m
概要	主な時代 繩文時代 弥生時代 平安時代以降
	主な遺構 陥し穴などの土坑70基・集石遺構3基・焼土遺構(縄文時代早期末～中期)
	埋納遺構(弥生時代中期)、土坑54基・溝状遺構57条(平安時代以降)
	主な遺物 繩文土器及び石器、弥生土器
	特殊遺物・遺構 有舌尖頭器、弥生時代中期の壺
調査期間	
1997(平成9)年4月21日～1997(平成9)年9月10日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第166集

南大浜遺跡

印刷日 2000年3月25日
 発行日 2000年3月31日
 編集 〒400-1508 東八代郡中道町下曾根923
 山梨県埋蔵文化財センター
 TEL055-266-3016
 発行 山梨県教育委員会
 日本道路公団東京建設局
 印刷所 株式会社 ヨネヤ

